

昭和十年五月廿日第三種郵便物認可(毎月一回一日發行)
昭和十年八月廿日印刷納本
昭和十年九月一日發行

第一卷 第五號



淨土

九三號

行けよ、この道 岩井大僧正

宗教と世界觀 大江精志郎

小説
旅の芭蕉 宇野浩二
好意の結果 北林透馬

黒谷法然上人傳 佐藤春夫

十七二

法然上人鑽仰會發行

中村辨康師著 (新刊)

法然上人の信仰生活

四六判一三〇頁
高雅上品な装幀
御影寫眞入
定價三十錢 (送料四錢)

法然上人の辿り給ひし信仰の道こそ、われらがしるべなり。

著者の言葉——精魂をつ

からしめて求めに求めた三十年の求道生活とその當時のあらゆる階級の人達を魅し盡した四十年の信仰生活とが何んなに近代人の胸を突くかを振りかへつて見たと思ふ。

それが形に現はれてゐやうとゐまいと、信仰を求め宗教に憧れるのは人間本來の姿である。古來宗教界の巨人と仰がれる聖者は悉くこの人間本來の姿を最も輝かしく明瞭に示した人間の精神の鏡であり、また萬人の中に潜む信仰心に迷りの路を與へ、その萌芽に開花の時を與へた慈雨である。故に若しそれ等巨人の信仰生活の内部を覗ふことが出来るなら、我々は日常無意識の中に捨て、省みなかつた生活の瓦礫の中に、突如燦然として輝く向上の珠玉を見出すのに快を恣にし、貧しくも思はれた己れの生活が如何に豊富な内容に充されてゐるかを再發見して驚嘆を禁じ得まい。

法然上人の巨大にして無双なる求道生活、信仰生活の迹を慕ひ、その法悦にひたらんとするも時に現代生活の汚濁を洗ひ清め清淨なる人間本來の姿に立返らんがために外ならぬ。

發行所

法然上人鑽仰會

之ぞ斷然優秀の

消炎鎮痛貼布藥

- 一、皮膚に貼つたまゝ入浴差支へなし
- 一、貼り換へず共一晝夜藥効を持続す
- 一、綺麗故不快の貼りアトを残さず
- 一、藥臭もなく悪性のかぶれも起さず
- 一、何れへ貼つても柔軟伸縮自由自在
- 一、ロートエキスを含む最新の威力



佳人の膏藥

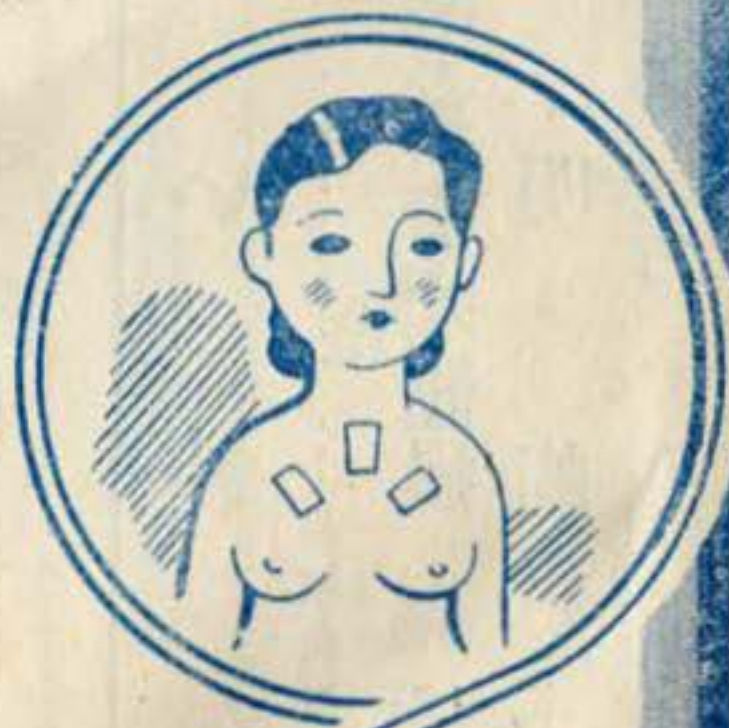
ママ・プラスター

愛讀者御優待

御住所氏名明記の上大木合名會社宛御申込下されば本誌讀者に限り見本贈呈

適應症

神經痛 肩の凝りウマチスの痛む所 運動に因る筋肉並關節痛 勞働に因る筋肉並關節痛 打撲 捻挫 胸痛 手足首背腰の痛む所 乳腺炎 齒痛 靴擦傷 疳氣 腫物 瘀傷



大木合名會社

東京市神田區鍛冶町三番五〇號 電話 田代表壹壹〇番

各藥店にあり
二十錢
二十五錢
一圓



浄土 九月號 目次

・表紙……………井上正春

・扉・目次カット……………小島一谿

行けよ、この道……………大僧正 岩井智海（二）

宗教と世界観……………「理想」主幹 大江精志郎（三二）

黒谷法然上人傳……………佐藤春夫……………八

彼岸への志向……………佐藤賢順（四六）

潑明るい朝……………相馬御風（一八）

露……………美校教授 香取秀眞（一九）

た……………讀經・朝風呂・ラチ才體操……………醫學博士 山下雅章（二二）

る……………朝の明朗……………塚本閣治（二三）

朝……………白銀色の光……………岡本かの子（二四）



梵語の話……………文學博士 萩原雲來（二六）

信仰の歷程 一枚起請文講義……………中村辨康（七〇）

法然上人をめぐる人々（四）

阿波助人信由來記……………佐賀一海（四〇）

旅の芭蕉……………（小糸島） 宇野浩二（二六）

好意の結果……………（吉田貫三郎畫） 北林透馬（四八）

傑作小説集
獨身醫師の生涯……………（小糸島） 山中峯太郎（五六）

洗練された美とは……………小口みち子（六六）

信仰相談……………中村辨康（六八） 震災に咲いた華……………（七）

涼味……………（四五） わらひばなし……………（六五）

編輯後記……………（八〇）

浄土 九月號 （第一卷 第五號）

著名大五の奨推刊新最

菊池

寛著

(佛敎聖典を語る叢書第十二回配本)
(四六判四五〇頁・定價壹圓五十錢・送十二錢)

十住心論弘法大師の宗教

文壇の大御所菊池先生が、平素傾倒せらるゝ弘法大師について、その生涯と宗教と、特に十住心論を主題として縦横に平易に叙述せられたるもの。先生の烟眼よりなる弘法大師とその宗教は、正しく天下一品たるを失はず、先生の著述としては全く希有なもの。全大衆に之を薦む。

長谷川如是閑著

(漢籍を語る叢書第五回配本)
(四六判四三〇頁・定價壹圓五十錢・送十二錢)

老子

所謂「老子」研究は汗牛充棟の有様であるが、これを思想的に解剖し體系づけたものは絶無といへよう。今日本が誇とする評論の著者長谷川先生が、古今東西の研究を通讀しつゝ、茲に思想的研究を完成されたるものにて、全く古今獨歩、老子研究の白眉として本社に自負するもの。

山口察常著

(漢籍を語る叢書第六回配本)

易經

易！現代人には非常な魅力をもつ。一寸筆竹でも持つて見たら……と誰人も考へようが、さて容易に「易」の何ものか」を指示してくれる書物がない。今著書は平素の研究を公にされ、最も平易に一通りは分る様口語文を以つて詳々と説いた現代的魅力満點のもの。

三木

清著 (近刊)

起信論

所謂三木哲學として令名高き著者が、佛敎哲學の基本たる起信論を、現代的に解説せらるゝ待望の名篇。

淨土宗管長山石井智海猊下著

二河白道の話

救ひを得るまで

朝の修養講話に全國民が等しく信仰の慈雨に浴した淨土宗管長様の放送講話です。

一人の凡夫が、遙か彼方に白道を見つめて……愈々救はれ念佛信者となるを……平易に面白く説かれたもの。

家々には必ず一冊を

◎一部五十錢・送料六錢

社版出東大

東京市芝公園七番地ノ一
東京市芝公園七番地ノ一
東京市芝公園七番地ノ一

所行發

號 月 九

淨 土



あとを一廟にしむれば遺法
あまねからず。予が遺跡は諸
州に遍満すべし。

ゆへいかんとなれば、念佛
の興行は愚老一期の勸化な
り。

されば念佛を修せん處は
貴賤を論ぜず海人漁人が苦屋
までも皆これ予が遺跡なり。

(法然上人)



行けよ、この道

大 賢 正 岩 井 智 海

一 白道といふこと

紅、紫、緑、青などと並べますと美しいといふ心もちがすぐ湧いて來ますが、白といふと、——美しい感じも勿論含んでをりますが——主として清らかな、清淨な、といふ感じが起つてまゐります。それゆゑ白き道と申しますと清淨の道、清らかな道といふことに譬へられるのであります。無量壽經には「清白の法」と説かれてあります。即ち清らかな白妙の道、白道のこととあります。

元來清いと云ひますと、清くないものに對する意味であります。清くない（穢い）道かと申せば、即ち食欲は穢であり、瞋恚はあさましいもの、愚痴の心は困つたものと云ふやうな三毒の煩惱を指すのであつて、これらのものに對して白き道が示されるわけなのであります。

この清淨の道は、人間の本性から申せば「眞性」とも「佛性」とも名けうるものであります。心の中に善い事をせねばならん、悪い事をしてはならん、他人を苦しめてはならん、などと云ふ思ひを念ずるのはとりも直さず清淨の道です。經典に據りますと、この清淨の道は巾四五寸ばかりとありますから、ほんの僅かな姿を人間の眼のまへにあらはしてゐるのにすぎません。それに反して、食欲の河、瞋恚の河は廣く深く果しもない有様で



あります。心の底に善いことをせねばならん、悪いことをしてはならん、他人を苦しめてはならんと思ひながら、實際生活の上では善いことは窮屈で、退屈で、睡たくて厭になる。悪いことは面白くて、愉快で、陽氣で、夜通しでも構はんといふやうなことは、我が心の中のあるあさましい方面の現はれであります。

今、淨土教の上から申しますと、この清淨の道、即ち白道は願往生心に當るのであります。即ち私どもが阿彌陀佛のまします淨土に往きたいと願ふ心を申すのであります。

元來淨土宗——淨土宗の名稱も種々に分れてをりましたが、御維新以來單にこの名だけが呼ばれてゐます——とは、どういふいはれから名けられたのかと申しますと、所期の上に名くとありまして、目的の場處に従つて名をつけたのが淨土宗といふ名稱になつたのであります。例へば伊勢神宮參拜の目的の人々が集まる團體に伊勢講、善光寺參詣の目的の團體に善光寺講といふ名稱を附すやうに、淨土にゆく人々の集まつてゐる教團でありますから、淨土宗と申します。

二 白道を歩め

平生自分の憎いと思つてゐる人に向ひ合ふときには、自分の心も恐らく醜い姿をしてゐることとせう。可愛い我が子に向ふときには、親の慈しみの姿を誠に美はしく現はしてゐる。その相對するものによつて自分の心を變へるのが人情の常です。今、清らかな如來の淨土を願ふ心が起りますれば、私共の心も自然々々に清らかになります。この淨土を願ふ心を白道に譬へたのでありますが、また淨土を願ふ心は僅かにこの世で私共が御縁に預つて起す巾四五寸の道に譬へましたが、しかし腹立ち、欲深な心と云ふものはオギヤーと生れた時から死ぬまでの一生涯にはびこつてゐるの



であります。無始の串習と申しまして、生れたときから本能的に乳をさぐるとか眠るとかと云ふ欲があります。誰も教へこまぬのに自然と呑みたい、眠りたい、といふ心を起してゐる。腹立ちの心も誰かに教はつてもつやうになるのではない。すやすや寝てゐる赤坊を可愛いと思つて揺り起せばワツと泣き出す。矢張り赤坊ながら怒つてゐる姿でありませう。實際、私共の身體のどの一部分を傷けても血が出るやうに、私共の心は生れると同時に全部欲に覆ひ包まれてゐるのであります。

ところが、極樂を願ふ心と云ふのは、この世ではじめて私共が御縁に預つて起すもので、しかも僅かな道巾にたとへられてゐるくらゐでありますから、諸欲の事柄は命がけでもやるといふ人間も、佛の慈悲の廣大無邊の念佛の如き信心はなか／＼起し難いのであります。

元來この白き道を渡つてゐる人の姿を見ますと、白き道を一步一步踏みしめながら靜かに進んでまゐります。爰でちよつと斷つて置きますが、「ものに譬へる」といふことは、ものの一部分を取ること、全部を取つて譬にすることではありません。「黒きこと烏の如し」と云ふ場合、烏の兩足や嘴のいろまでがどうのかうのと理窟を持込まれたのでは譬にならない、たゞ烏の黒い一部分を取つたと、へとするのはです。そこで、今、白き道を一步一步歩いてゐるからと云つて、それが自力で歩いてゐる譬に取つてはならないのです。偏に佛の願力を頼んで念佛相續する有様を、人間の歩いてゐることに譬へたものと心得て頂きたいのであります。その歩む道は白道である。これが大切なことです。いくら道があつたからとて歩むことがなければ目的に達せられぬまたいくら歩いてても目的への道がなければ迷ふばかりです。これを心行具足と申しまして、念佛申すには必ず信心があり、信仰の道の上には必ず念佛を唱名と云ふことが實行されるのであります。かくして念佛生活は腹立つ煩にも焼かれず、妨げられず、欲の波にも穢されず、水にも火にも白道は嚴として如來攝取の力が漂うて、慈悲の波が波立てば立つほど精進の勇を増して一筋に進みゆくのであります。



三 同時同音の利益

この心行具足と云ふことが往生極樂の目的に達する大切なことでありまして、なほこれをたとへにとつて見ますと、汽車に乗つてゐる人の姿を眼にすれば、それがそのまま心行具足の姿になつて映じます。乗つて腰かけてゐる姿が行であつて、その腰かけてゐる人の心の中にはこの汽車に乗つてゐれば東京に行かれると信じてゐるのが安心であります。その乗る行と往けると信ずる心とが一致してゐるわけでありますから、これをそのまま心行具足の姿と譬へてよろしいわけであります。

前に白道は願往生心に當ると申しましたが、その往生といふ言葉を完全に理解せずに、只往生極樂のために念佛申すといたしますと、淨土宗の教へはまるで死んだ後のみを救けて頂く教へで、人間の現世には何ら必要のない教へのやうに誤解してゐる方も少くないと思ひますから、更に説明を加へてみませう。

こゝに東京から京都見物に來た人があつて、路銀を全部費消してしまつたゆゑ東京の宅に送金を頼んだ。この金を受取つて京都驛で東京行の切符を買つた。その切符にはどんな利益があるかと云へば、京都から東京といふ遠方の目的地に行かれることです。切符さへもつてゐれば汽車の力で我々を目的地に運んでくれる。切符がなければ乗車出來ず、従つて目的地に達するわけにも行きませんので切符の力といふものがこゝにあらはれて來ますが、實際の救ひは汽車の力であります。淨土宗にとつて見ますと、念佛を申す力、即ち私が念佛を申すといふ力で救はれるやうに思ひますが、さうでなくてその救はれる力は如來の大願力といふ力でありまゝす。その力に救はれるには念佛を申すほかはない、恰も汽車の例で切符を失はぬやうにもつてゐなければならぬといふことに當ります。切符さへあれば汽車に乗れる、念佛さへ稱へれば如來の慈悲に救はれるのです。乗りこんだその時から汽車にたすけられて進み行くやうに、「約束の念佛は申し候よ、やらうやらじは彌陀のはか



らひ」なのであります。

念佛を申しはじめたその時から、攝取不捨の大慈大悲の中に日々を生き生きて往くのが、往生極樂の大目的を有する者の仕合せであります。これを同時同音の利益と申しまして、拍子木は打つてゐたら二三年経つて初めて音がするといふものではなく、二つの木で打合せた瞬間に音がするのです。また同時同相の利益とも云ひますが、印は朱肉を染めて押して置いたら一年も経つてから字が顯はれるといふのではなく、印は押すと同時に字を顯はすやうに、南無阿彌陀佛と稱ふところに應聲即現の利益を蒙るのであります。即ち理想は往生極樂といふやうに遠大なものであるとしても、實現は聲々そこに生かされ救けられ恵まれつつ白道を進む我々人間の姿を指すのであります。

四 不捨の誓約

こゝに我が法然上人の御法語を拜して見ます。

「問うて曰く、攝取の益をかうぶる事は平生か臨終かいかん、答へて曰く、平生の時なり乃至阿彌陀佛は八萬四千の光明をはなちて照し給ふなり、平生の時照しはじめて最後まで捨て給はぬなり、故に不捨の誓約と申す也。」

このやうに如來の恩光に護られながら、どんな烈しい水火の煩惱の只中でも、極めて楽しい力ある人生を進ませて戴き、恰も太陽の東山に輝き出で、夕べに美しい光明のしま木綿を織りつつ暮れてゆく如く、私共もよろこびの中に生きて、よろこびの中に働かせてもらひ、夕日の輝くあかるい今世から、更に明るい淨土に往生の本懐をとげたいものと思ふ次第であります。

少年の義俠

神田今川小路の電車通りに富士

屋といふ米穀商さんがあつた。大勢家内で、奉公人を除いた身内家族だけでも主人夫婦、五つを頭に三人の小さな子供があり、それに主人の妹夫婦も同居してゐた。十二間の間口を控へた店をもつてゐたから、相當な暮しをしてゐたに違ひない。

震火に咲く人情の華

丁度地震のあつたときには、主人夫婦等は店に出てゐた。五つになる長女は二階で一人で遊んでゐた。二番目の児がそれを追つて二階へ上らうと梯子段の中程までヨチ／＼と登つて行つた時であ

る。異様な烈風が一陣戸外を吹き捲つたと思ふ瞬間、あの怖ろしい第一回目の大強震が突然襲つたのである。

「それ地震だッ！」

と思ふ間もなく、家屋は大揺れに揺れて忽ち二階は凄じい物音と共に、一と堪りもなく崩れ落ちた。一家は悉くその下敷になつたのである。

その儘であつたら富士屋の家族は云ふまでもなく惨死したであらう。が、見よ！いま崩れ落ちた二階の戸袋を押破つてぬつと一つの黒い顔が現はれた。泥にまみれたところ／＼傷いて紅に染んだ小さな顔、それは田舎から出たてのその店の小僧さんであつた。彼は必至に身を掻いて戸袋から道路へ飛び出した。が、そのへんに主人夫婦らの影も形もないのを見極

めると、再び倒潰した家の中へとつて返した。その途端に第二、第三の地震が襲つて壁は落ちる、瓦は飛ぶ、それらが凄まじい砂煙を濛々と揚げる。中へ入つた小僧さんの危険は云ふまでもない、天井の梁一つ落ちてさへ身は粉微塵になるのだ、だが彼はそんなことを構つてゐられなかつた。血走る彼の眼は只一途に主人達の身の上を案じ求めた。と、見ると主人達は倒れた家の、金庫の側にびつたり相寄つて出るに出不れず、觀念の眼を閉ぢたまゝ顫へてゐる。「占めたッ」と小僧さんは心に叫んだが、うれしさの餘り取り亂すやうな彼ではなかつた。咄嗟の場合にも沈著な分別が働いた。へこれで主人達は大丈夫だが子供がゐない。子供を第一に助け出さねばならない。から殊勝にも決心する

と、更に危険を冒して手當り次第に家中を探し廻り、梯子段から二番目の子を梁の下から長女を小さな兩手にしつかり抱きかゝへて道路へ連れ出し、三度家へ入つて順次に主人夫婦とその妹夫婦とを連れ出した。主婦さんの手にはまだ生れて間もない赤ん坊が、死んでも離すまじと抱かれてゐた。

かうして小僧さんは主人の家族七人を完全に救ひ出したのである。

「お前は命の親だ、富士屋のある限り、お前の恩は忘れないだらう。」

小僧さんの手を取つて、主人夫婦は止め度もない感激の涙に咽んだ。

★

★

★



第八 信修念佛往生門

(念佛往生を信仰修行し給ふおん事)

上人生れて九つのおん時より、四十三に至るまで三十五年の間のおん學問と申せば、専ら生死から出離の道を思ひ煩ひ、順次に煩惱から解脱するの要路を知らんが爲めであつた。それだから遍く諸宗を學び給ふたのに、師匠であつた方が卻つてお弟子になつた。或る時上人が自分にお話遊ばされたには、法相三論天台華嚴眞言佛心など諸の大乗の

宗旨は、遍く學び悉く呑み込んでみる。入口は違つてゐるけれど皆佛性の一理を悟り明かに顯はすもので、つまりは皆同じものである。法は深妙ではあるけれども、我が機では皆及びもつかぬ。經典を披き覽るに、わが智は最も愚かに思へる。行法を習ひ修行して見るとその眞意はなかなか判りにくい。それにつけても朝な朝な惡趣に墮ち沈

むことは恐怖し、夕べ夕べにはわが身の出離の縁に開けたのを悲歎した。休むひまなき無念の思ひはたとへば渡に舟を失ふが如く、おぼつかない心細さは闇中で道に迷ふたやうであつた。歎きながら如來の教法を習ひ、悲しみながら人師の解釋を學んだ。黒谷の法恩藏に入つて一切經を披き見ることは、もう五遍にも及んだものであつた。それなのに今だにまだ出離の要法を得悟らず、憂ひ悲しみは日々にいや増さり、學び究めんとする志は愈々旺んであつた。

この時善因が忽ち熟し、宿縁頓に顯れて、善導和尚が勸化の八帖(その頃はまだ般舟讚は世に行はれてゐなかつたから)の聖書を拜見したら、末代造惡の凡夫が生死を出離する趣旨も聊か心得たと思はれた。大方の見當がついた位でまだ深意は悟り究めなかつたけれど隨喜身に餘り身の毛もために堅ち、特別に見ること三遍、前後合せて八遍であつた。或る時、觀經散善義の一心に専ら彌陀の名號を念するの文に至つて善導和尚の本心を捉へ得た。喜ばしさの餘り、聞く人とてもなかつたけれども、自分のやうな下根の人間が法を修行するには阿彌陀佛が法藏と名告つて因位に居られた昔に、豫め定め置いて下さつてあつた哩と

高聲に唱へてうれしさ骨身に徹るをおぼえ、落涙頻りであつた。終に承安五年乙丑の春、齡四十三の時、びたりと餘行をすてて、一向專修念佛門に入つて、始めて六萬遍を唱へた(長日即ち一晝夜に六萬遍の稱名念佛をするのである)上人はその後更に一萬遍を加へて七萬遍の念佛行者となつた。或る時、上人が悲歎しながら申されるには、道心の無い者は誰も彼も名利の世俗の生に住してゐて修行することが出来ないから生死を出離しない。道心のある智者は、今度になつたら生死を出離しようと謂て、遠來の縁を期してゐるそれ故に順次の得度解脫は甚だ覺束ない。信心の手を空しくして法財を取らず。つまり是といふのも淨土の縁がなくとて、輪廻する難行の機である。さては淨土の縁はあるけれども、未だ良師に出遇はない人である。このやうな二種の機は淨土の修行し易く往生し易いことを知らず。必ず永劫の輪廻に落ちる。さればこそ源空が初めの師の肥後阿闍梨皇圓は宏才博覽の上に智慧深遠であつたけれども御自分の機分を考へるに今度は生死を出離しにくい。蛇身が長命の果報を受けて彌勒の出世に値て、得道せんと欲せられた。その願空しからず、大蛇の身を受けて、

遠江國笠原庄櫻池（水面一町許）に住み給ふのである。
智慧あるが故に生死の離れ難い事を知り、道心のあるが故
に、次の佛に遇はんことを願はれた。けれどもまだ淨土の
法門は御存じなかつた。誠にあさましい事どもである。此
事は源空が深き悲歎である。あの時わが身がもし此法門を
知つてゐさへするなら、信ぜられ
たか信ぜられなかつたかは知
るべくもないが、ともあれ
お勧め申して見たらうも
のを。哀れなるかな、

悲しいかな。穢土を逃れる
ことの甚だ難いことを
深く悲しんで、定めし
蛇身三熱の苦を受
給ふであら
う。

第九 善導來現授教門

（善導和尚が來り現はれて教
を授け給ふおん事）



或る時上人が自分に向つて仰せられるには、源空既に善導和尚の釋に敬服して、その本意を知ることが出来た。本意といふのは、亂想の凡夫はただ觀念の無い稱名の一行だけでも、佛の本願にもつて増上縁として順次に極樂世界に往生するといふのである。自分だけの往生は決定して疑はなくなつた。けれども有縁の無智な人々を勸進して淨土に生ぜしめたいと思ふ。それにつけても善導和尚の釋の讀み方が正しいであらうか。間違つてゐないか。凡智ではわきまへ難い。とかう思案して、心中に思ひ勞ふ夜の夢の中に一人の僧があつた。腰から上は墨染、裳より下は金色の寶衣を著けて居られる。自分は頭を低れ合掌して大徳は何方であらせられるかと問うた。すると靈異な僧は答へて申されるに、我は善導である。汝が專修念佛を弘めやうと望んでゐる料簡の義理は我が釋文と違はない。釋文の讀方はそこでこの證言を請け得て間違ひなしと定まつた。それ故に同時に亦佛意にも違はない。よろしく弘通されたい。勸化の利益は定めし多からうと。自分は伏して請ひ申すには、それならば大徳よ、淨土の教門を目のあたりおん口づからお示し賜はつて自らも信じ他をも教化せしめ給へ。和尚が

申されるには、よし、よし、菩薩大聖、淨土の教法、願ひにまかせて授け與へようと、そこで（淨土）三部の契經と（その釋義たる）八軸の金典とを恭しく授け給はること慇懃鄭重であつたと。（夢のお話をお聞かせ下さつた）上人の勸化、和尚の承認許可、よく佛意に稱うてゐる。専ら信仰すべきである。

第十 勸進念佛往生門

（念佛往生を勸進し給ふの事）

上人が已に和尚の指示と面授とを蒙つて、黒谷の禪坊を出で吉水の庵室に住し給うてよりこのかた、御自分で御修行も他人の教化もともに念佛の勸めであつた。それ故に上人御自身の御作りになつた選擇集にも自行他化唯念佛を緯とす。然して間希に津（彼岸に渡る便宜）を問ふ者には、示すに西方の要津を以てし、適行を尋ぬる者には誨ふるに念佛の別行を以てす。之を信する者多く、信ぜざる者少し。當に知るべし淨土之教の時機に叩せるを。而して當に行運すべき也。念佛の行は水月に感じて昇降を得る也とい

へり。上人の化導日々に盛に世に弘まり。道俗男女唯念佛をこととし。王城も邊土も専ら稱名を口遊とす。

或る時上人が示して申されるに、淨土宗の學生たるべきものは先づこの旨を心得て置くがいい。有縁の人のためには、身、命、財を捨てても、偏に淨土の法を説くべく、自ら往生のためにはあらゆる世俗の煩ひを離れて、専ら念佛の行を修するがいい。此の二事の外に世を益する生活はないと仰せられた。御遺言が誠に貴い。それ故此を記して末代に傳へる。

上人の御弟子たる聖覺が謹んでお尋ね申し上げた。現代末法の時は、人知蒙昧で、如來の教法に應じてゐないから、多くは法にかなふものではない。聖道門の修行者はわけても虚假心を懷いてゐる。かう思はれますのは淨土教を敬重する執情のためでありませうか、それとも亦これが本當でせうか。上人がお答へ遊ばされたには、末法の濁世には聖道の虚假、といふ一事は異論はない。先哲も悉くさう判断決論してゐる。淨土の學人も少虚はあるけれども、聖道の多分に虚假なのとは同等ではない。それ故に禪林寺の十因にも云つてゐる——夫れ衆生は無始より諸趣に輪廻

す。諸佛更に出でて無量(の衆生)を濟度す、恨むらくは諸佛の利益に洩れ猶ほ生死の凡夫と爲るがごとし。適釋尊の遺法に値ふ蓋ぞ出離の聖行に勵まざる。一生を空しく暮して、何の日にか再會せむ。直言止觀の行は道幽に迷ひ易し、三論法宗の教は理奥く悟り難し。勇猛精進ならざる者、何ぞ之を修せざる。聰明利智の者にあらざれば、誰か之を學ばんや。朝家簡定其賞を賜ふ。學徒望を競うて其欲を増し、三密行に暗くして恭しく遍正の位に登り、戒を毀るの質を飭りて誤つて持律の職に居る。實世間の假名は智者の厭ふ所也。今念佛宗に至る者、行する所の佛號は行住坐を妨げず。期する所の極樂は道俗貴賤を簡ばず。衆生罪重くとも一に何ぞ能く滅せざらむ。彌陀の願は深く十念往生す。公家賞せざるも自ら名位の欲を離る。檀那祈らざるも亦虚受の罪なし。況んや南北の諸宗互に權實の教を諍ひ、西方一家獨方便門無し。といつてゐる。是れ故に末法には聖道の行人自然に虚偽を懷き、念佛の行者は多くは至誠なり。淨土門の少しの虚假は機(ひと)の過にして行體の失ではない。聖道門の多い虚假は咎であつて機(ひと)の過失ではない。これこそ行が難しいのであつて機に應じないがためで

ある。さればと言つて萬機偽を懐くものとも限らない。制智精進で機と法とが相應したら容易に道を得るであらう。この點は混亂してはならない。淨土宗の意は、難きを捨てて易きを取、敢て偏執すること勿れ。二道の縁を糺すがいい。治承四年壬子十二月二十八日。平家が南都を攻めた時、東大寺に火がかかつたものだから、何も彼も炎上し焼失した。其後造興のために右大辨藤原行隆朝臣をもて、大奉行に定められたので、行隆は恐懼して昔からあのお寺は一天四海の人民を勸て、御建立あらせられた。今又勸進の聖を仰付けられるとすれば、眞の力量ある聖の力を假るのでなければ、俗臣では力及び難いと奏上し奉るとそれならば先例に従ふのがよろしからうと仰せ出しあつて、大勸進の聖が御沙汰があつたのに、法然房源空こそその器量に相當してゐると、選が定まつたので行隆朝臣を御使で勅宣遊ばされたところ、上人が申されるには源空が好むところは念佛勸進の行である。塔像を起立の大勸進職はその器量ではない。若し勸進の職をば受け申したならば世間並みの務めが心を悩まして念佛の行は退轉するであらう。念佛を永く廢してゐるとすれば、唯に佛意に背くのみではなく、同時

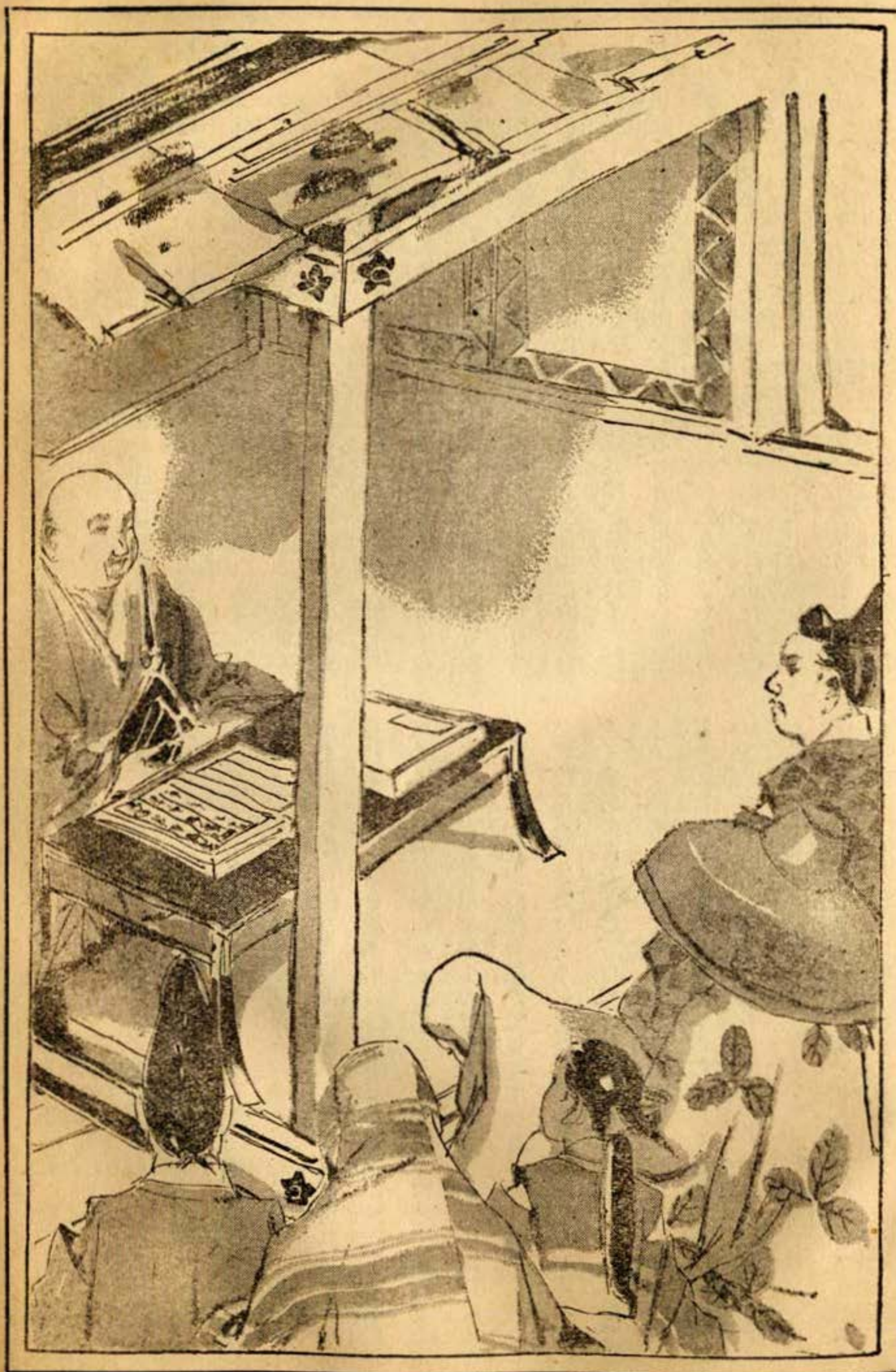
に和尚（善導）の意にも違ふであらう。若し念佛を退轉せしめまいと思へば造興は生立し遂げ難からう。造營の功を遂げなければ御下命に背き奉る次第にならずにゐない。一面佛意を考へて漸ち一面には勅命を恐れ奉る。それだから一旦の宣旨にお隨ひ申さうよりは永く御辭退申し上げるが増しかと存ぜられます。と固く御辭退申された。行隆朝臣は上人の志の堅固なのを見て、その旨を奏上し奉ると、もし上人が門徒の中にそれに相應する器量の者があつたら、推舉申し上げよとの重ねて仰せが下つたので上人は醍醐の俊乗坊重源を召して、勅に應じて參内せしめた。法皇後白喜び給うて遂に俊乗坊を大勸進の職に補せられた。上人は宣旨を辭し奉つて偏へに稱名の行を興して自他を利し、唯専ら念佛を修行するばかりで寸暇をも惜み給うた。

或る時鎮西の聖光房と聖覺と但だ二人きりで、上人のおんに淨土の法門の御教へに預かつた時、聖光房がお尋ね申して云ふに、仰いで御本願を信じ、信實に往生を念として願つてはゐながらも妄念が頻に起つて止み難く散亂心が彌増しに旺んで鎮まらない。この事は如何いたしたらよろ

しいものでせうか。上人がお答へ遊ばされるには、妄念や餘念をも願す、散亂不淨をも厭はず唯口に稱名を唱へよ。能く稱名しさへすれば、佛名の徳として妄念も自づと止み散亂も自然と靜まり、身業意業口業の三業も自ら調和し、願心か自然と發生する。それ故往生と願ふ心が少くて南無阿彌陀佛。妄念の起る時も南無阿彌陀佛。散亂の増す時も南無阿彌陀佛。善心の起る時にも南無阿彌陀佛。不淨の時も南無阿彌陀佛。三心の具はる時にも南無阿彌陀佛。三心の現れ起るにも南無阿彌陀佛。三心の成就するにも南無阿彌陀佛。これがすなはち決定往生の方便である。よく心腑に納めて置いて忘れぬかよいぞ。

(三心といふのは(1)至誠心——虚假不實を離れて衷心り淨土を願ふ心。(2)深心——深い反省によつて痛切に罪業の惡人愚痴の凡夫たる自己を知る心。(3)廻向發願心——自己が修め得た功德を一切衆生に施し及ぼして自他共に淨土に往生せんと願ふ心の三つを指して呼ぶのである。この三心を一心に具へることは念佛者の理想でこの三心具足の一心を以て一向に彌陀の淨土に往生を願ふのを阿彌陀經では一心不亂と説いてゐる)そこで聖覺がお尋ね申した。只今の御

意見のやうだと三心が缺けてゐても唯佛名を唱へれば名號の徳として三心が發生し得て往生するであらうといふ風にお伺ひ致しました。然るに和尚は虚假心の行人は、晝夜十二時に大慌て大急ぎに、さながら頭の燃えつくのを拂ふ如く勇猛に勤行をするとも往生はならぬと判定して居られる。それとこれとの意味はどうして一致するものでせうか。聖光房の言ふのに、わたくしの考へも同様でございませう。上人がお答へ遊ばされたのには、その不審は今の話とは事が違ふ。自分の言ふのは、本來は三心を具してゐるけれども來歴と環境とが時と場合によつて、法の如くでないのを治する仕方を述べたまでである。今引合ひに出した和尚の解釋は一途に三心の缺けてゐるのを嫌ふのである。その趣旨は甚だ結構である。それだから決して批難にはならないと仰せられたから弟子ども兩人とも信仰あまつて、申し演べん詞もなく、兩人ともただ、阿といふばかりであつた。へ十六門記が聖覺の著述であるといふのを疑ふ物は、このあたりの主張から推定して、誰か初期の鎮西派の一人が、名門の出で當時の道俗の間に令名の一般的であつた聖覺が偶法然一門下であつたのを利用してその名に假托し



て發表したものではなからうかと論じてゐるのを見た事があつた思ひ出したから序に記して置く)

顯眞法眼が大原に居住の時惠光房永辨法印が事の序に訪問した時、法眼が問はれるに、末代濁惡の我等凡夫、罪業日に増して、求道心は散亂、信仰は癡惑である。いかにしてこの度の世で生死を離れたものであらうか、と。法印が答へて云ふには、此條は賢者も愚者もみな御同然であります。但この程法然上人にお目にかかつて出離の要法を明かにし得ました。所謂彌陀の他力による念佛往生と申すのがそれです。此法を學び得て後は、常日頃の積る憂悶も雲の如くに忽ち散じ、この程の歡びは喻へんに物もありません。この種の義は法然上人にお遇ひなされて委細に御尋ねなされましと申したいといふので、或る時、法眼は上人に御對面なされて、まだ罪障を斷ち切ることの出来ない亂想の凡夫がいかがして順次極樂の往生を致したものでせうかと問はせられると上人は成佛は甚だむづかしく往生ならば極く容易である。善導和尚の御解釋によつて三部經を拜見すると、佛の本願力を強緣として、亂想の凡夫が報佛の淨土に生ずることが出来る。自力聖道に對する執着の情を以

て他力淨土の眞門をお疑ひなさるなと答給うたので、法眼はものも仰せられず、そのまま坊に歸られて後、人に語り給ふには、智慧第一の法然房も、見立てるところの義理(哲理)に於ては大に僻見があると。これを上人が傳へ聞て、自分の知らない事には謗のが一般の理である。今更驚く程のことでもない。尤もな次第と仰せられたのを、法眼の方がまた傳へ聞き給うて、自力他力兩門に關して語つて仰せられるには、情ら思ふに自分は顯密の二教の法門を兼學してゐるけれども偏に名利を志して解脱のために學んだのではない。法然房は幼少の時から道心者で生死に出離せんがために一代の佛法を學んで見立てたところの哲理である。洵に錯はありそうにもない。それだからといふので深く前言の非を悔ひ、從來の信を専らにしたいといふので上人を龍禪寺に請じ給ふた。此事が世に傳なつて淨土の教法を聽聞しようがための道俗が雲の如く集つて來て勝林院の室内に溢れた。前權少都明遍碩學法印權大僧都證眞碩學待從己講貞慶法相宗法印權大僧都智海碩學此等の明匠を始めとして諸宗の賢哲、無數。賢哲揃ひであつたから皆面々に富樓那の辯舌を振つて、あとからあとから論難をした。

驚しいことは盛んな市の如くであつた。上人は鸚鵡の
 轉が如くに人々の質疑や論難に明答を與へ給うたから、
 諸宗の明匠たちも舌を卷いて言ふことがなく、靜かなこと
 は春の日和の如くであつた。爾時、上人は聖道の諸宗は義
 理が深遠で解釋が隱微で、證を得ること甚だ難かしい。こ
 れといふのも世が末になつて人は愚に、機と教とが相反か
 ら其修行に得堪えずなく苦海に沈淪してまだ涅槃の彼岸
 に到達しない。淨土の一門は解し易く行じ易いから得度解
 脫は最も速かである。愚鈍下智を捨てないから、凡庸な學
 徒でも勵みが出る。破戒重罪を簡ばないから惡人でさへも
 往生できる。行住坐臥を別たないから念念にいつでも常に
 行じ、時と處と諸縁とを論じないから、散亂の心でも同じ
 く唱へられる。その止惡の方法はといへば、寛大に念時日
 の三懺悔を許してゐる。その修善の方法はといへば一念十
 念（一聲の念佛十聲の念佛）でも猶往生が叶ふと勸めてゐ
 る。和尚（善導）の釋讃に唯念佛といふもので光明に攝取せ
 られる。これで見ても本願といふものは最も力強いもの
 とわかるではないか。眞の光明が法界に充ち遍く、その光
 の觸れた者は心も不退轉であると述べてゐる。何人をも攝

取して捨てぬ光明の利益は念念（聲を重ねて）稱名の徳を
 授ける。これをこそ信すべく、これをこそ勤行すべきであ
 る。と一日一夜の間言葉を盡して淨土教を講義し説教し給
 うたから、聽聞の道俗、或る者は涙を流して信仰し、或者
 は聲を發して歡喜した。その中に主人役の顯眞は、雙眼か
 ら涙を流し、佛前に小踊して、自ら香爐をとつて、群集の
 間をめぐり歩きながら、高聲に念佛したので、南北（南都
 北嶺、奈良と叡山）の明匠三百餘人異口同音に念佛を修行
 すること三日三夜が間絶え間もなかつた。その外の參禮結
 縁の聽聞衆はその數も知れぬ。この時から以後、處々の修
 道場では悉く佛名（阿彌陀の）を唱へ、童子の戯れにも念
 佛を口ずさみとした。其後法眼顯眞は召し出されて天台の
 座主に補せられた。實に叡山の高僧並みなみな方であ
 る。此等の明匠も皆上人に歸依された。又座主顯眞は十二
 人の受持を定めて置いて不斷念佛を行はせられた。ひたす
 らに稱名を繰り返して、外の行は雜へない。其行を勤めは
 じめ今に精進を勵んでまだ退轉しない。（つゞく）



明　　る　　い　　朝

相馬御風

★

明るい朝を迎へる爲には、私達は暗い、しかし清い、安らかな夜の眠を得なければならぬ。清く安らかな夜の眠を通らずに明るい朝を迎へようとしても、到底それは不可能である。

汚れた心には、疲れた頭には、朝の光が明るければ明るいほど、却てますます苦しく且惱ましい。

科學の力は夜を年一年とますます明るくしつつある。或はつひに地上から「暗」を全然なくしてしまふかも知れない。

しかし「暗」を伴はない「明」は、果して人間を眞に幸福ならしめ得るであらうか。

★

現代の都會の夜は、ますます明るくなるばかりである。都會の人々はますます明るき夜

を求め明るき灯影の刺激強き樂を求めつつある。

しかし明るき夜は、明るくされた暗に外ならない。それは「神ながらの明るさ」ではない。いかに明るくされても、それは明るい明でなくして、明るさを粧うた暗に外ならない。

だから如何に明るくされた夜の歡樂でも、それは「かなながら」に明るい晝の太空の下の歡樂とは違ふ。

救ひ難い疲れはつひにそれらの人々の上に來るであらう。

★

よく働く爲に夜を明るくする人々でも、やはりよき休みを得る爲には、暗き夜の安らかな眠を待たずにゐられぬ。或は時に明るかるべき晝を暗くしてまで眠の安らかさを得なく

てはゐられないことになる。

かくて働く人にも、遊ぶ人にも、明るい夜を持つことは、反對に暗い晝を持たなければならぬ結果になる。それはよい意味に於ても、また悪い意味に於てもである。

★

明るい朝の光の中に、爽かに立ち得た人々の間に、おのづから呼びかはされる、

「お早う！」

「お早う！」

の聲ほど朗かな人間の言葉は無いであらう。

そしてそれらの人々は多く暗い夜の静けさに、安らかな眠りに、一切を托し切つた後にめざめた人々である。

一切の不安、思はく、煩ひ……さうしたもののから離れ去つて、自己全體を眠のふところに投げ入れることの出來た人々のみが、眞に

明るい朝を持ち得る。

眞の明るさは「神ながら」の明るさであらねばならぬ。そしてそれは明るくされた夜、即ち

露

東京美術学校教授

香 取 秀 眞

ち明るさを粧うた暗とは全く違つてゐる。

(八月四日)

朝早く起きたときの、あのすがすがしい氣持は誰しも同じだらうと思ひます。朝起はしてみたが一向よい氣持にも思へなかつたと云ふ人は、おそらく無いこととせう。實際、朝

起きたときの氣持といふものは、何とも云へないよいものです。

若い時、富士山に登つたことがあります。その時水垢離をとつた氣持は今だに忘れない程です。麓の吉田に一泊したのですが、丁度宿屋の前に二尺許りの綺麗な流れがあつて、その流れで水垢離をとるのです。尤も水垢離をとる所だけは少し廣くなつてゐて、瀧のやうになつてゐます。先達が是非一緒にやれと云ふので、私どもも共に水垢離をとり、

六根清淨を祈つたものです。

その頃、月見草が澤山みだれ咲いてゐまして、その一葉／＼が露にしつとり濡れてゐました。そこへ朝日がさつと照り輝いて來たものですから、その美しさ、その爽やかさ、今だに忘れません。

露、これもなか／＼風情の多いものです。

私はこの露に無限の清澄さを感じてゐます。いや、或る意味においては随分と教へられることもあるのです。古聖の歌に、

露の身はこゝかしこにて消へぬとも

心はおなじ華のうてなぞ

と云ふのがありますが、これも實によく人

生の相を云ひ表はした歌だと思つて居ります。

かつて紅葉美しき秋・羽前の羽黒山に遊んだことがあります。その時は盛岡まで赴かねばならない急ぎの旅でしたので、山麓で一夜を明かし、翌朝は夜も明けやらぬ四時半頃に床から起き出して、風光優れたる羽黒山を探索することになりました。あたりの景色はまだ薄緋の中につゝまれて靜かに眠むつてゐます。寂靜そのものです。冷え／＼とした山の空氣が身に浸みて感じられます。手向村にかゝると、丁度東の空から朝日がさしのぼつて、遠く鳥嶺山が悠然とその秀姿を現はし、山裾は殆んど雲にかこまれほの／＼と煙つてゐるそのさま等、見るからに雄大な景色でした。その上、名も知れぬ野草の上や、松の葉に露がきら／＼と光つてゐるのです。私はい





つもかうした朝の露を見てゐた故か、そのうつくしさを歌に詠む氣も興らなかつた程でありました。

その後、京都の峯定寺へ行つたことがあります。この時は少し足を痛めてゐましたので、馬をやとつてもらひました。矢張り朝暗いうちで、残月がほんのりとすがたを見せてゐました。半里ばかりも進んだかと思ふ頃になると巨杉老杉が鬱蒼として茂つてゐる所へ出ました。

折から太陽はさん／＼と輝きはじめました。しづまり返つた自然の宿に、その杉の葉の緑は一瞥の塵もなく、滴るやうな色を映して、水晶のやうな露がいともきれいに咲いてゐるのでした。

朝日に照り添ふ露のすがた——よく歌にされるものですが、實際眼のあたりかうして見

る時のすがたは、何とも云へぬ美しさです。

朝霧の消へゆくのみち草のはら

葉ごとの露に陽を宿しをり

私は此處で露といふもののほんたうの美しさを初めて知つたわけではないのですが、とにかくその時の氣持は今に記憶してゐて、その思ひ出も深いものがあります。

しかし、羽前で見た時の感じ、京都で得たときの感じ、それは歌に詠んで見れば、どちらも同じです。感じの差といふものが、はつきり出ないのです。それは繪にしても同じだらうと思ひます。晝、朝、晩の區別は、どんな陰影をつけてもはつきり出るものではないと思ひます。工藝品の模様について考へても同じです。たとへば蒔繪に芒を畫いて、そこへ露をあしらうために銀の小粒を嵌込んだとする。なるほど銀の小粒が露に見へるのですが、さてそれが朝露だか夕露だかの表現は出て來ないのです。

名狀出來ないといふ言葉があります、實際ひとく心に印象された感じと云ふものは、

矢張りその人自らが心で解するより仕方がないと思ひます。

又よく見る景色ですが、雨あがりの氣持もなか／＼捨てがたいよいものです。しかし、これとてもその時にふれ、心に映する感興はそれ／＼違ひませうが、それをひとたび歌にでもしてみると皆同じになります。たとへば花が咲いてゐやうと、艶やかな藤の花か垂れてゐやうと、赤桐の花が落ちてゐやうと、歌にしてみればその氣持といふものは殆んど同じです。

夜やあけむ露はしと／＼のぼるらし

やがて霜にやおきかはるらん

冬の朝の薄霜、これもいゝものです。だが、これは寒いことの嫌ひなものには一寸不向きです。寒さのためにその感興が毀はされることもあるのでせう。

露にしても同じです。東京ではあまり見られませんが、日の出る前、夏から秋にかけてよく見られる朝露は又實にいゝものです。

かうした風景を眞に味はふには結局、朝早く起きることです。そして心からそれを味つてみることです。そこに言語を超絶した自然の美しさ、盡きぬ命の美はしさが溢々と感ぜ

られます。朝の景色はいゝものです。ひとり露のみならず、凡てが不滅の若き生命で潑刺としてゐます。

讀經に朝風呂、ラヂオ體操

醫學博士　山下　雅　章

起床ラツパになる。

五時半である。

私の町では夏期休暇中、毎朝このラツパの

音が、靜かな朝の空氣をやぶつてなりひびいてくる。非常時日本を背負つて立つ市民の健康増進を圖るため、毎朝ラヂオ體操の會に參加することにしてゐるので、この目覺し役は

特に青年團の方にやつて戴くことにしてゐるのである。若人の吹き鳴らすラツパの音、それを合圖に老若男女手に手を取りあつて、小學校の校庭に集合するのである。

都大路もまだ靜かで、電車も時々しか走らない。乗つてゐる人も少ないのであらう。それだけにレールの軋る音も一際高く聞える。街はもう朝だ、一日の活動を始めてゐる。

蒸し暑かつた昨夜の氣溫も何處へやら、ヒヤリとした肌觸りのする朝である。

氣を付け！

注目！！

號令と同時に、日章旗がスル／＼と掲揚柱に擧つてゆく。國旗だ、我等の國旗、日本國民の魂のシムボルだ。

青年團喇叭鼓隊の吹奏する「君が代」の莊嚴なる樂の音は、自然と我等の伍體に云ひ知れぬ身震いを起させる。日本國民としての血が躍り立つのである。そして、「苔のむすまで」と合唱し終つた時、國旗は既に空中高く翻翻として風に靡いてゐる。

校舎の屋根を斜に掠めてさして来る太陽の光線は、集まりむらがつてゐる數百人の細長い影を大地に投げつけてゐる。

全國の皆さん、お早うございます——例のアナ君の聲がスピーカーから流れ出る。正に午前六時だ、大氣を浴びてのび／＼と一、二、三……をやる。元氣にラヂオ體操をやり終つた時にはジワリと汗が肌にニジミ出る。

かうして汗ばんだ體を、サラリと朝風呂で洗ひ流し、サバ／＼と乾かした後の氣分の爽かさ——。





かくて神棚に御神燈をあげて禮拜し、佛壇に御燈明を點じて香を熏らし、合掌三拜、鉦をうち鳴らして『觀音經』を一卷讀誦するのです。これが又私の毎朝のつとめです。どんなことがあらうと缺かしたことの無い日課の一つです。

そのお經の讀み方は、成るべく丹田に力を入れて聲を大きく出すのです。この讀誦法が非常に身體に良いと思ふ、その理由は、正座して丹田に力を入れて大きな聲を出す、自然に深呼吸をしなければならなくなるし、又聲を出すことによつてお腹を空かす運動ともなるからです。

神前にあげられた御神火のゆら／＼と揺らぐさま、佛壇に供へられた恍々たる聖火の光りを観詰めつゝ端座した時の氣分、合掌した時の心の朗かさ、湯浴みした後でかうした三

味の氣持に入つたときの爽やかな心、こんな朗かなことが又とあらうか。

朗かな朝、それは總て主觀的のものであるかも知れぬ。だから私が朗かであつても、他人はどうだか解らぬ。しかし所詮は心の持ち方一つだ。我々が學生時代に唄つたことのあ

る俗謡に、
泣いて暮らすも五十年
笑つて暮らすも五十年
泣いて暮らすも笑ふのも
己が心の置きどころ

と云ふのがあつたが、その歌はよくこの邊のことを教へてゐると思ふ。



私は毎朝必ず風呂に入る。それも自分の家の湯へ入るより町の風呂屋へ行くのが好きである、湯屋だと色々な職業の人が来るし、又朝湯となると合はせる顔振れが大抵定まつてゐる。一つ二つ言葉を交はしてゐる中に、お馴染になる。すると各自が持つてゐるエピソードを話しあふやうになるから、ボツネンと浴つてゐるより遙に楽しく時間を過ごすこと

も出来る。それに朝湯は混雑しないし、湯がきれいでタツブリある。なみ／＼と浴槽一杯にある風呂の中に浴つてゐる氣分は又格別である、

第一朝風呂へ入ると一日中、體がボカ／＼してゐる。風邪なんか引くこともない。その點は冷水摩擦に似てゐるけれども、冷水摩擦は寒くなると仲々實行が出来ない。私も以前は何度も試みたけれど最多になると、そのために乾度風邪を引いてしまつたので、遂に止めて朝湯と云ふことにした。

只、注意しなければならぬことは、湯から上らうとする時に、湯の中で萬邊なく體をタオルで擦つて良く温まり、上つてから體を十分に乾かしてから着物を着ること、さうすれば冬でも「湯さめ」なんか決してしない。又朝湯になれない人でも風邪を引くことは斷然ない。

此の間も、馬鹿に蒸し暑くて眠れなかつた翌朝のこと、近所の藥屋の旦那と云ふ物知屋が、

「日本は世界中で一番湿度が高いそうですね。」

と云ふから、

「そんな話ですよ。」

と相槌を打つたら乗り氣になつて、先生、

「日本人がこう入浴が好きなのも、湿度の關

係からぢやありませんか。」

と云つた。それには返事に困つたが、男の顔

にも障ると思つて、それもそうだらうし、長

年の習慣もあるでせうと答へた。

藥屋の旦那は湿度が高いため皮膚が汗ば

む、汗ばむから氣持が悪くなる、悪いから風

呂へ入ると云ふ結論を話して呉れた。こんな

科學者に會へるのも朝湯の御利益だ。

徳川三代將軍が例の僧侶で政治家の天海僧

正に「如何したら體を丈夫にして長生きが出

来るか。」ときいたら、天海の曰く、

粗食、正直、日湯、ダラニ（お經）

折々、下風、せられたがよし

と、入浴を奨励したと云ふことである。

風呂の話で思ひ出したが、昔イタリーのネ

ダスチーと云ふ伯爵嬢の夫人は、自分の容色

を娘時代の若さに取り返さうと、凡そ六百人

殺してその血で風呂をたてて浴したと云ふこ

とである

何の迷信か、どんな作用があると信じての

行爲かは知らないが、とても恐ろしい事をした

ものだ。

たとひ、若返りの効はない白湯ではあるけ

れども、朝風呂へ浴つた氣分は又別の味のあ

るものだ。

ラヂオ體操は一年中、號令をかけて呉れる

アナウンサーがある。だから朝寝をしな

いで

朝の明朗

塚本 閏 治

でも空氣が身に染透るやうに寒い。邊りはま

下界に居ても朝の氣持は忘れ難なくすがすがしいものだが、高い山の上の朝の心持は、それにも増して爽快であると共に、更に無限の餘さをも持つ。

小屋の中の暖いシュラーフザツクから飛び出して、いきなり山頂に佇んで見ると、盛夏

早起きさへすればその恩恵に浴せる。併しや

らうと思へば何時でも一人で出来る。だが夏

季のやうに、あのすがすがしい大氣の中に新

しい陽を浴びながら、廣い校庭で多勢の人と

一緒にやる味は又格別よい。夕食を少し控え

目に攝つて一夜をぐつすりとお眠し、翌朝、

いつもの連中と共に一風呂浴びて、燃お上る

御燈明の焰を視詰めたがら正座合掌するこん

な朗かな朝は他にはあるまい。

かくして朝毎に、朗かに日毎に愉しい仕事

が出来る。





るで太古のやうな静けさ。前面の深い谷は一面の雲海に蔽はれ、對岸には大洋の島のやうに黒い一連の山のシルエツトが浮んで居る。震えながら、此の世にも稀なる美しい世界を眺め入つて居ると、突然ばら色の光が射し初めて来る。やがて火の塊のやうな太陽が、ぼつかりと山の端に浮ぶ。急に四邊が輝き出して、萬物が生氣を帯びる。新しい世界が創造されたやうな感じた。恐らく原始の世界はかうでもあつたらうか。

此の時、陽光を浴びて山頂に立つ登山者の心持は明朗そのものである。我利、妄執、愛欲、争闘、凡そ醜い人間界の感情は一切洗ひ清められて、まるで神の世界に居るやうな清々しさである。そしてその山頂の朝の一ときほど、人を宗教的な氣持に引入れる瞬間はないだらう。此の心の現象は、單に山を楽しむ

人達ばかりでなく、スポーツ的な登攀をする近代の若い登山者にとつても同様である。

一體スポーツ的の登山者は、自然と争闘して山岳の征服を夢みる。そして雪煙を揚げる白銀の頂稜や、未だ嘗つて人類の手足に觸れたことのない岩の峭壁などこそ、彼等の絶大な魅力であると云ふ處から、かゝる宗教的な静平な朝の一ときなどは、彼等にとつて一顧の價值もないものだ、一般から見なされて居る。しかし之は近代登山者にとつて悲しい誤解だ。實は近代登山者こそ、最も眞剣に山を宗教的に見てゐるものなのである。何故と云ふに、彼等にとつては、山は悉く生きてゐるものであつて、山靈のない山などと云ふことは考へることが出来ないからである。

白銀色の光り

私は一々自分のする事に出来るだけ丹念な心遣ひをする。どんな些細なこと、例へば一

昔スウキスでは、日曜日の登山には特別の困難と危険が伴ふ處から、之を避ける風習があつた。之は安息日に山を荒さぬことによつて、「神の怒り」に觸れるのを避ける爲めだと云ふ事である。スポーツ的な外國の登山者も、斯様に宗教的な一面を持つてゐたのである。その山登りを受けついだ近代のスポーツ的登山者も、山を神格化することには人後に落ちない譯である。

そんな處から、山上の黎明が總ての登山者の氣持を殊更敬虔にし宗教的にすることは、もとより當然の次第である。従つて山上の朝の明朗は、登山者にとつて實に恵まれたるときであると共に、最も尊い一瞬でもある。

岡本かの子

寸した買物、草いちり、食事、休息、掃除、何一つとして決していゝ加減にあしらつた

り、済ましたりしない。いつも眞向きに眞剣に取りかゝる。

普通、世間の人達は常識上から、重大な事と餘り重大でない事との二つをはつきり、區別して、重大な事には緊張して立向ふのであるが、餘り重大でない事は軽い氣持ちであしらつて置く。だから、體の使ひ方が緩急宜しきを得て、息をつく暇が充分あるやうである。しかし私は生來、その緩急自在の使ひ分けをする事が何となく嫌ひでもあるし、又、事實出来ない性分である。世間一般の人達が軽く、いゝ加減で済ますやうな事を、私は非常に重大事のやうに取扱つてゐる。

そんな性分の爲めに、人は私と對座して、可なり重苦しい氣持がするとか、輕快な冗談を彈ませられないのを、いゝかしく思ふとか非難する。誠にその通りである。依つて私の性格がそのやうな窮屈な思ひを人に與へるのを一應は恐縮するのであるが、しかし私は内心次のやうな抗議を抱くのである。人が常識上、或は習慣上、簡単に決定する物事の重大、非

重大が、果して人生の根本義に向つても亦、重大、非重大と差別する事が出来るであらうか。淨土へ向ふ私たち旅行者にとつて一般世間の普通の考へから差別される輕重を、その儘單純に受け取つて良いものだらうか。一粒の罌粟にも宇宙の實相は示現せられ、一つの名號の中にも萬德は籠るではないか。

このやうな抗議は兎も角として、私は性格上、毎日立ち向ふ一々の事に出来るだけの心遣ひをする。そして其の一つ／＼をいろ／＼と味はひつゝ日を暮すのであるから、私は一日中、可なり張り切つた生活をしてゐる。だが夜になると流石に身も心も、疲れ切つてしまふ。最早や私に餘力が残つてゐない。一日の生命は全用されてゐる。其處に悔ひも慾望も無い。たゞ混沌として深い眠りに落ちて行く。

熟睡は短時間で充分疲勞を癒して呉れる。私は夜明けが待遠しい程ずつと前から眼を覺まして、まだ明け切らぬ薄明の中で持ち前の大きな兩眼をばち／＼やつてゐる。新しく始

まつた日に對する意氣込みが段々私をせき立て、もう一刻も床の中にちつとしてゐられなくなる。そこで「夜も明けよ」とばかり兩戸を操り、窓を残らず開放して部屋一杯に新鮮な空氣を詰め換へ、やがて射し込んで来る夜明けの透徹した朗かな光を待つ。徐々に白銀色の莊嚴な光りが室の隅々まで遍滿して来る佛の恵み給ふたよき朝、疲れも汚れも染まぬ無垢な朝。私は生れ變つたやうな氣持で、先づ私の一番好きな事から仕事を始めるのである。

鷺の曉さむしきり／＼す

明星や櫻さだめぬ山かづら

有明の面おとすや時鳥

(其角)





小 説

旅路の芭蕉

宇 野 浩 二

序 芭蕉庵

その半生を旅で暮し、死ぬ時も旅で死んだ芭蕉が、初めて、旅らしい旅を思ひ立つたのは、彼が四十一歳の秋であつた。その時の事を、彼は次ぎのやうに書いてある。

「千里に旅立ちて路糧をつつまず、三更月下無何に入ると云ひけむ、昔の人の杖にすがりて、貞享甲子秋八月、江上の破屋を出づるほど、風の聲そぞろ寒げなり。」

これは、遠い長い旅に立つのに、道中の食糧も路用の金も持たずに、着のみ着のまま、野に寝たり、山に寝たりして、夜更けの月の光を浴びながら、俗世間の事を忘れて、行脚をしたといふ、昔の人の真似をして、貞享甲子元年、秋の半、川のほとりの、住みなれた、あばら屋を出た、川風の肌寒い日であつた、といふ程の意味であるが、この文章の後に、次ぎの歌が附いてゐる。

野ざらしをここに風のしむ身かな

これは、不斷から餘り丈夫でない自分が、遠い旅に出るのであるから、いつ何處で野倒死をするか、いつ何處の野邊に屍を晒すかも知れない、それは元より覺悟をしてはゐるが、過ぎた事を思ひ出し、行先の事を考へると、そぞろに秋風が身にしみる旅立である、といふ程の意味であるが、前の文章につづけて讀むと、何か悲愴な感じが、讀む者の心を打つところがある。殊に、『野ざらし』といふ言葉に「野晒」つまり、雨風に晒される、といふ意味と「骸」つまり、雨風に晒されて白けた頭骨、といふ意味とが、あるといふ事を考へると、「野ざらし」をここに風のしむ身かな」と咏んだ芭蕉の心が、如何に突詰めたものであつたか、が察せられる。——と思はれるのである。——

先に述べたごとく、この時、芭蕉は、四十一歳の男盛りであつたが、髪を剃つてゐた上に、髭が灰色になり、額と頬に目に立つ皺が殖え、それに背が低かつたので、六十歳ぐらゐに見えた。旅の仕度には、檜笠をかぶり、椿の杖を突き、紙衣の衣に十徳を着け、襟に頭陀袋をかけ、手に十八の珠數を携へた。道連には、知里といふ親しい友達が選ばれた。

旅の豫定は、東海道を通り、名古屋から伊勢に廻り、伊勢から故郷である伊勢の上野、それから奈良、それから先はまだ極つてゐなかつた。が、この故郷へ歸る旅は殆ど十年ぶりになるので、芭蕉は、深川の芭蕉庵を立つ時、

秋十とせ却て江戸をさす故郷

と咏んだ。これは、十年住みつくと、本當の故郷より、却て江戸の方が自分の故郷のやうに懐しく思はれる、といふ意味である。併し、この十年の江戸の生活は、回想すると、楽しい事もあつたが苦しい事の方が多かつた。といふのは、十年程前に、止むを得ない事情があつて故郷を捨て、江戸に出さへしたら、自分の得意な俳諧の道で生活が出来たらう、と思つて、江戸に来て見たところが、全くその當がはづれたからである。先づ初め水道工事の役人になつたが、それは直ぐ止め、次ぎに俳諧師になり、次ぎに俳諧師を業とするやうになつた。後に芭蕉庵と呼ばれるやうになつた、深川の六間堀の草庵に隱遁するやうになつたのは、延寶八年、彼が三十七歳の年であつた。その頃、既に『延寶二十歌仙』(一名、『桃青』(芭蕉)の別名)門弟獨吟二十歌仙」と題する歌集が出来てゐたから、彼にも既に二十人程の門弟が出来てゐたのである。現に、この六間堀の草庵は

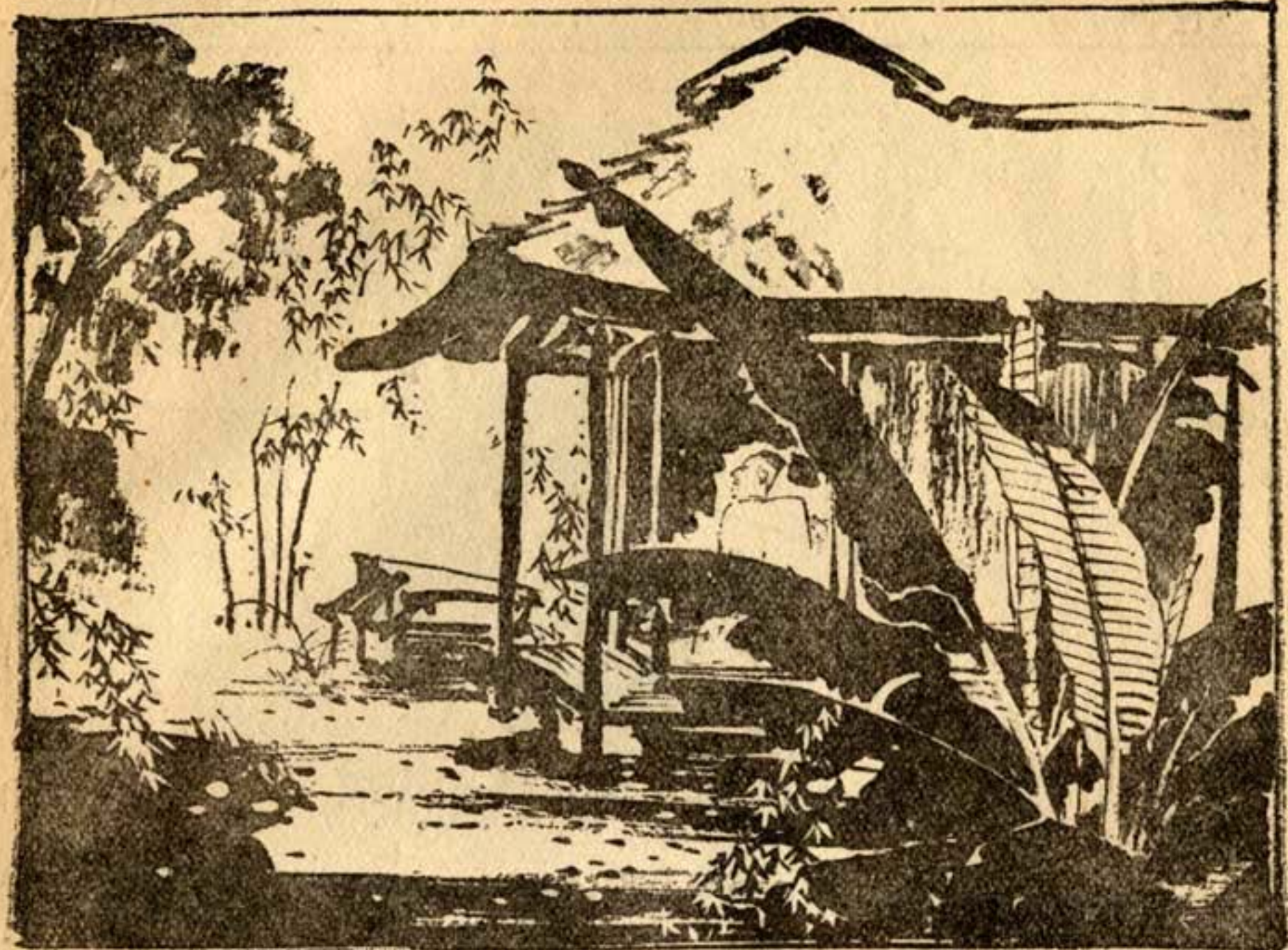
門弟の杉風の所有であつた。

この芭蕉庵は、六間堀の小名木川が隅田川に注ぐところに掛つてゐる萬年橋の北の方にあつた、今の深川區西元町の邊である。當時、小名木川が隅田川に注ぐところを、三ツ又口と云つて、芭蕉が住んでゐた元祿頃は、月見、納涼の船が集る所で、實に景色の好い所であつたと云ふ。この地の展望を「抑も深川の地低しと雖も、江戸城を距ること遠からず、富士、筑波を兩眼に眺め、上野、淺草の花の雲、出る船入る船。……」と素堂が書いてゐる程である。併し、眺望はこのやうに素晴しかつたが、この草庵は、全體で八疊ぐらゐの大きさで、それが一間しかなかつたのであるから、いくら芭蕉のやうな隱遁者の住居と云つても、餘りに狭過ぎた。が、草庵には違ひなかつたから、竹縁もあり、前庭に名物の芭蕉も繁茂してゐるし、傍に茶の木もあり、粗末な垣もあり、古池もあり、井戸もあり、北窓もあつた。ところが、少し大雨が降ると雨漏がする、冬は隙間風が吹込んで寒いので、腰屏風を置かなければならなかつた。その代り、そのお蔭で、

芭蕉野分して鹽に雨を聞く夜かな
 艫の聲波を打て 陽氷る夜やなみだ

などいふやうな傑作が生れた。が、さういふ傑作を生む機縁を造る家ではあつたが、この草庵は、芭蕉のやうな胃腸の弱い人には、最も不適當な最も不健康な住居であつた。が、それは未だ彼が生命とする『風流』といふ點で我慢が出来たが、どうしても此の草庵に安閑としてゐられない氣持が近頃頻りに起つて來た。それが今度彼に『野ざらし』を覺悟で旅立つ決心を起させる元になつたのであつた。その元は、彼がこの芭蕉庵に隱遁する前からあつたのである

芭蕉が、寛文十二年、二十九歳の年の九月に、江戸本船町の名主小澤卜尺が、京都から江戸に歸る時に、同道して江戸に下り、この卜尺の紹介で、神田上水道の一部である、小石川關口の水道工事の役人になつた年は、何年であるか、はつきり明らないのであるが、その役を引いた年は、延寶二年、三十一歳の年である事は確らしい、その年、彼は薙髮して俳諧師になり、其角が彼の門に入門してゐるからである。さうして、彼が、江戸市中で、公然俳諧師の看板を掛け、弟子を取り、新しい俳諧を講じ始めたのは、延寶四年、彼が三十三歳の年であつた。ところが、彼の性質として、他の宗匠のやうに、弟子の機嫌をとつた



り、弟子の俳諧に一々點をつけてやつたり、する事をしなかつたので、次第に弟子が減つてしまつた。そこで、どうにも生活の仕様がなくなつたので、前に述べた通り、江戸市外の深川に隠遁したのである。が、芭蕉庵に住むやうになつても、元より覺悟はしてゐたが、収入の道が全くなかつたので、その頃の作に、春を祝ふ餅がない事を歎じて、

餅を夢に折詰ふしだの草枕

とか、又一「富家喰ニ肌肉、丈夫喫ニ菜根、予は乏し、」と云ふ前書があつて、

雪の朝獨り干鮭を嚙得たり

とか、いふ俳句がある。この二つの俳句だけ見ても、芭蕉庵の芭蕉が如何に貧乏してゐたかが忍ばれる。が、彼はかういふ貧乏をも堪えることが出来た。ところが、彼の貧乏を見かねて、——彼の弟子たちの中で、其角とか嵐雪と年少の弟子には出来なかつたが、——杉風とか素堂とか云ふ芭蕉と同じ年頃で資産のある弟子たちは、寒くなると、綿入を持つて來たり頭巾を持つて來たり、又、味噌や、醬油などを持つて來たりした。或る時、北鯤といふ弟子が、長さ二尺三四寸、直径五寸程の、細長い、大きな、瓢箪を持つて來た。この瓢箪を、北鯤が持つて來た時、他の一人



の弟子が「餘り大き過ぎて、花瓶の代りにもならない、と云つて、酒入にもならない」と云ふと、別の一人の弟子が「米入にしたらいだらう」と云つた。この時以來、この瓢箪は芭蕉庵の米入になつた。さうして、この瓢箪が少し輕くなつたな、と思ふと、いつの間にか元の重さになつてゐた。——かういふ事は、一と月か、せいぜい半年ぐらゐは、弟子たちや友だちの、好意或ひは深切と思つて、心の中で、感謝したり、有難い事に思つたりして、楽しんでゐられるが、生活の不自由が餘りなくなり過ぎたり、生活が餘り安定し過ぎたりすると、一般の言葉で云ふと、藝術の方がお留守になる、芭蕉の言葉で云ふと、『風雅の寂』から遠さかる事になる、——かういふ時、友だちや弟子たちが心配して、淋しさうな顔をしてゐる芭蕉を勞らうとする、芭蕉の機嫌はますます悪くなる。この時分に作つた俳句に、

元日や思へば淋し秋の暮

といふのがある。これを簡単に説くと、秋の淋しさに比べると、元日の方がずっと淋しいといふ意味である。

この年の冬、芭蕉庵が焼けたのである。——
初めに「野さらしを心に風のしむ身かな」と咏んだ芭蕉

の心に、何か深く考へることがあつたのではないか、と書いたのに答へて少しむづかしい言葉で云ふと、この行脚の原因は、安易な生活に對する煩悶と、一切を侘び盡した懊惱と、火事に逢つた無常觀などの遣り場を、この行脚に求めたのではないだらうか。或ひは又一つ、一般の言葉で云ふと、藝術と實生活とが一致しなかつた惱みの、芭蕉の言葉で云ふと、俳諧の道と實生活とが一致しなかつた惱みの遣り場を、この行脚に求めたのではないだらうか。併し、又そのやうな、原因とか、理由とか云ふ、堅苦しい考へ方をしないで、これを、唯、芭蕉の持つて生れた、旅行好きの最初の現れと見てもいいか、とも思ふ。芭蕉が如何に旅行好き行脚好きであつたかは、次ぎの文章を見れば分る。

『山や野や海邊の、美しい景色に、造化の巧みな業を見、住む家もない修道者の旅した跡を慕ひ、又は風雅な詩人たちの心を辿る。住家を去つたのであるから、何の道具類もいらぬ。懷に何も持つてゐないから、道中の心配もいらぬ。駕籠に乗る代りに、ゆるゆる歩いて行けば、まづい夕食がどんな御馳走よりもうまい。何處で泊るときめてゐないのだから、朝あわてて宿を立たなくてもいい。ただ一日の願ひは二つだけ。今夜は居心地のよい宿屋に泊りたいこ

と。自分の足に合つた草鞋を手に入れたいこと。それだけ少し氣にかかるだけだ。時の移ると共に氣も變り、日毎に毎に氣分が改る。もし風雅の分る人に會へれば、これに越した喜びはない。』

ただ、この文章には、芭蕉が、貞享四年、四十四歳の秋、四十一歳の秋の旅より、落着いた心で旅行した時に書いたものであるから、實に悠悠たる『旅の心得』を書いてゐるが、四十一歳の時の旅は、途中で

死にもせぬ旅寢の果よ秋の暮

草まくら犬もしぐるるか夜の聲

などといふやうな暗い侘しい聲が漂うてゐる俳句を詠んでゐる。その四十一歳の年の秋の『野さらしを心に風のしむ身かな』といふ悲愴な一句を詠んで旅立つた、芭蕉が前に挙げたやうに、東海道を経て、伊勢、伊賀、吉野、美濃、尾張を経て、再び伊賀に寄り、年を越して、京都、奈良、大津、熱田を経て、木曾路より江戸に歸るまでの旅路で會ふ、さまざまの出來事を述べるつもりだつたのであるが、いろいろの故障で、このやうな「端書」にすらならなかつた尻切蜻蛉のやうな文章を書いた事を、讀者と編輯者に詫びながら次ぎを約束して筆を擱く。



宗教と世界觀

大江 精 志 郎

人間は本來宗教的要求を有するものである。しかるに近代の諸科學も諸文化も、その要求を満してくれなかつた。そのために現代の人間生活は、或る精神的不安を感じるに至つたのである。現代の人間は自らのあらゆる生活内容に就て實に多種多様な經驗や知識を多量に有しながら、しかも人心の根底に存する大なる空虚をどうすることもできない。それを意識するとせざるとに拘らず、その空虚は實在したのである。それを自覺するや否や、それは人間生活に於ける根本的に重大な問題として、顯れてくる。そして我々は今や近代文化或は文明の解決し得ない大なる問題に衝きあたつてゐるのである。それは一言にして云へば宗教の問題である。

宗教は人間的生活の精神的態度を根源的に規定するものである。その最も眞實な規定を把握したものが、既成宗教の内の偉大な宗教であると思ふ。この根本的に眞實な規定を把握せずし

て、人間は根源的に不安であり、この不安を克服するものを求めざるを得ない。現在我國に於て佛教の復興が唱へられ、既成宗教類似の新宗教が一面盛んに流行してゐるのは、人間のこの本來的要求に基づくものであると考へる。この復興や流行もその意味に於て、理由なく起つてきたものでなく、過渡期的時代の一狀態として意味を有するものであるが、しかし我々は、飢ゑたるものが一片のパンにも本能的にすがりつくやうに、ただ何か宗教的なものをさへ提供してくればよいと云ふのでは、眞にこの飢ゑを満す所以ではないであらう。我々は、何が故に飢ゑてゐるのか。この飢ゑは、如何にすれば眞に克服することができるか。換言すれば、現代のこの重大問題を前にして、我々はそれを解決すべく、何を要求し如何なる努力をなすべきであるか。この點に就て明らかな自覺を持つことが、眞に問題を解く所以である。しかし現代の宗教復興や類似宗教の流行は、この點に就て未だ明確な自

覺に到達してゐると思はれない。

現代の佛教復興論者は勿論、類似宗教さへも、確かに宗教的なものを我々に提示してをり、その點がまた世間に迎へられる所以であるが、それに依て、果して現代の人間生活を根源的に規定し、その生活を行つた眞の規準を示し得たであらうか。佛陀やキリストの言に従ひつつ佛に歸依し神に服従する精神は、まことに結構であるが、その精神を、現代の人間生活或は現代の人間世界に於て、如何に生かし實現するかが、明らかにされなければ、云はば寶の持ち腐りではないか。佛陀の教説を言葉巧みに説教して、人を宗教的光りに浴したと思ふ主觀的悦びに導き入れるのも、また人間苦の一つである疾病を現代醫學の忘却せし一面たる心の持ち方並びにそれに伴ふ行動によつて或る限度に於て治すことも、悪いことではないが、それらの主觀的愉快また末梢的問題よりも、更に重大なる問題即ち現代の人間生活並びに世界を、如何なる根本的な眞理とその諸規準に依て、改造するかを、我々は人間生活の最も根本的規定たる宗教の立場から考へねばならなくはないか。

宗教を、ただ神や佛への歸依信仰とのみ解するのは、現世乖離的な隱遁的宗教である。かかる宗教は、神をそれ自體純粹に、現世とは別個に存立すると考へ、現世は神の意志に反するものであり従つてそれは現世とは峻別される神に依てのみ救はれると考へ

る現代危機神學にも共通する誤解を有してゐる。かく神の意志に反する罪惡の現世であるならば、むしろ現世を棄てて神のみに奉仕するのが却て價值ある生活とも考へられるに到るであらう。しかしかゝる隱遁者と雖も、やはり人間の生活を営まねばならない以上、やはり現世的なものに關連せずして生活し得ないと云ふ矛盾を見逃すわけには行かない。大戰に於て人間的罪禍を餘りにも露骨に見せつけられ、また餘りに利己的人間中心主義に立つ墮落せる宗教——敵對し殺戮し合ふ各國民が何れも神を自己の味方の如く考へた——に絶望せる現代ヨーロッパから、神中心的思想の生れてきたのも理由あることであるが、しかしよく考へれば、神を中心としその意志に従はうとする如き人間即ちかくの如き神の素質を有し神と關係を有する人間でなくして、神中心主義の宗教も無意味であらう。かくも大規模な罪禍に充たされた現世の内から、眞實の神を中心として、現世をその禍から救ひ出さなければならぬと云ふ自覺の呼び起されると云ふことは、即ち神が現世或は人間と異質的な別個の存在ではなくして、むしろそれらの内に或はそれらと共に實存してゐるからである。神は、人間的罪や過ちを様々な仕方で自覺せしめ且つその克服を指示するものである。神は世界を罪過から救ひ出し、自らの意志を世界に實現すべき諸々の秩序を、人間に行はせようとする。人間は神が全體として何であるかを知ることにはできないが神が人間に顯示する限

りの諸秩序を認識することが出来る。それは人間が神と共に神の内、換言すれば神と融合し親和して生くるものであるからである。即ち神は人間生活を有意義に行はせるために、世界の諸秩序を人間に觀させるのである。神は世界觀を人間自體に顯示するのである。人間の生活は、この意味に於て神の意志の顯現である。神と人間或は世界との關係をかく考へる私は、現代危機神學や、また現世的諸問題特に世界觀問題に完全の關心を持たぬ多少の程度に隱遁的な宗教に對しては、單に神に沈潜し神を凝視するのみに止まらず、現世をまた人間を深く確實に觀るべきことを要求したい。それこそ却て現世を顯現した神に忠なる所以である。そこで過去の宗教に於ても勿論さうであつた如く、現代の宗教は、現代の世界觀を有しなければならぬ。世界觀なき宗教は、現世に盲目である。しかしまた宗教なき世界觀は、現世の深き意義に徹することができない。

現代の世界觀と云つても、過去の時代の世界觀と本質的異種のもではない。それは過去の世界觀の生長であり發展でなければならぬ。世界觀の相對論者の主張する如く、類型的に異種であり、或は異質的なものでない。むしろ根柢に於ては變ることなき包括的普遍的世界觀の發展であり充實である。それは恰も一つの樹木が枝を分岐し葉を繁茂させる生長の如くである。蟲ばめる葉を凋落せしめ、枯れたる枝を脱落させつつ、眞の世界觀とそれに

從ふ人間世界を發展せしめねばならない。宗教は、云はば、かかる樹木の根である。根なき樹木もまた地上的部分なき根も、眞の生命を保ち得ない如く、宗教なき世界觀も、また世界觀なき宗教も、その完全なる意義を有し得ない。現世或は人間を充分に顯みない宗教は、人間の究極の據り所たる神と人間との根本關係を規定する宗教の根本意義に矛盾するであらう。現世を深く充分に理解し、それを神にまで結びつける宗教こそ、眞の宗教であり、現代我々の要求する宗教でもある。宗教と世界觀とは統一されねばならぬ。このことはまた信仰と知識との統一をも要求するものである。しかし世界觀とそれの實現に依る文化的所産とが、宗教の手段となる如き意味で統一されるのではない。學術が學術的眞理を、また藝術が美を、道德が社會的正義を、實現せんと眞摯に努力するその自己目的追求の文化活動そのものが、廣義に於ける善（單なる道德的善から區別して）と考へられるのである。學術的眞理、藝術的美、道德的善等の文化價值を制約し批判する原理がそれらの外部に例へば宗教に存するのではなくして、それらの諸文化價值自體に自己目的と獨自の原理を有しつつ、しかも宗教的觀點からすれば、それらの文化價值自體が、宗教的價值として或は聖なるものとして、或はそれらが人類の究極目的たる最高善に合致する意味での廣義に於ける善として、考へられなければならない。

田中耕太郎博士の『中央公論』八月號に發表された論文「文化問題の世界觀的基礎」は、カトリシズムの立場から文化問題を論じられた眞摯な論文であり、その主意に於て大いに賛成であるが、諸文化を宗教の手段視し、人類の使命は「文化自體に依つて與へられるものでなく、宗教に依つて指示される」と考へられることは、文化の本質に對して充分の理解あるものと云へないであらう。勿論經濟や法律や諸々の技術並びに科學の應用と云ふ如きものは、社會的正義或は道德的善の手段として考へられてよいと思ふ。けれども眞・善・美の如き本質としての文化價值は、それ自身自己目的を有し、決して宗教からの指示に依つて規定されるものではなく、自己目的と自己原理に依つて規定されてゐながら、しかもそれらが相互的に調和統一されるところに、最高善が或は聖なる價值が實現されるのであると思ふ。田中博士の如く諸文化價值を宗教に依つて指示される道德的使命の手段の如く考へる道德主義は、文化の本質を害ひ、却て眞の人間の使命を全うせざるに到りはしないか。聖なる價值は、單に眞善美等の人間的文化活動の本質のみに盡きるものではないが、しかしギンデルバントも考へる如くそれらの價值本質以外に存するものでなく、むしろそれらの諸價值本質そのものに共通する價值としても、承認されなければならぬ。即ち諸文化價值は、聖なる全體的價值秩序の部分そのものとして考へられるべきであつて、その文化的秩序の實

現を、それと區別されたる宗教的目的の手段と考へられるべきでない。むしろ自己目的的活動の文化實現そのものが神の榮光に一層の輝きあらしめる所以であり、從つて宗教的目的にも合一するものでなければならぬ。それは勿論田中博士の排斥する文化至上主義ではないが、宗教と世界觀並びにその文化所産とを統一的に把握する文化主義と云ふことができよう。田中博士の如く、文化的本質と宗教的本質とを別個の範疇のものと考へ、文化を宗教の手段の如く考へる中世的な宗教至上主義に、私は賛成できない。人間並びにその文化活動は、神の榮光を増大する手段ではなく、神の榮光そのものであり目的そのものである。人間は神に驅使される奴隸や婢僕ではなく、云はば神の子であり神の分身である。従つて宗教は人間の文化活動そのものの内に生きてゐるものでなければならぬ。神は、我々のあらゆる生活の内に、その全智全能をはたらかせてゐる。かくの如き世界觀と宗教とは融合され統一されるであらう。かかる世界觀の學制的な體系化が、私の云ふ世界觀學であり、その概要に就ては、拙著『世界觀學序想』中の諸論文や、『理想』第五十號「人生觀の哲學」の内の拙論に論じたが、なほ次の機會に、その思想を更に展開したいと思つてゐる。かくの如き世界觀及びその學的研究を通してのみ、現代の宗教問題は、その徹底的にして明確なる解決を得るであらう。かくしてまた知識と信仰とは統一され得るのである。(昭和十年七月)

話^わ 講^{かう} 語^ご 聖^{せい}

梵語のはなし

大正大學教授
文學博士

荻原雲來

梵語と梵字

梵語といふのは梵即ち婆羅門の言葉といふことで、つまり印度の言葉であります。印度の言葉には雅語と俗語とがあります。

雅語の方はサンスクリタ (Sanskrit) と云ひ、完全無缺に出来上つてゐる言葉といふ意味で、これを聖語とも云ひます。普通サンスクリットと云はれてゐるものであります。印度古來、婆羅門の聖典に用ひられてゐるものであります。これに對して一般人が日常用ひてゐました所謂俗語はプラクリタ (Prakrit) といひます。彼のセイロン、ビルマ、シヤム等の聖典に用ひられてをりますパーリ (Pali)

語も、つまり此の俗語の一種であります。釋尊が説法に用ひられてゐました言葉も、當時一般に用ひられてゐた一種の俗語です。

次に梵字について述べます。何處の國でもさうであります。先づ第一に言葉があつてその後に文字が出来たのであります。印度でもずつと昔は唯人の口から耳へと言葉だけが話され、文字には表はされてゐなかつたのであります。これを聞持と申して聖者の教もたゞ記憶によつて傳へられてゐたのであります。それだけに昔の印度の人々は非常にその記憶力が強く、また確かなものだつたと申します。釋尊御在世の時代に於ても亦さうでありました。

その後、シリヤ、メソポタミヤ地方との交通が盛になるやうになりました。アラメヤ人 (Aramen) の文字が輸入されて用ひられました。彼の佛教護持者として最も有名な阿育王の碑文に出て來ます文字の如きは、西洋紀元前三百五十年頃のもので最も古いものに屬します。

我が國で、塔婆や、墓碑や、字曼荼羅等に見受けられる文字は、悉曇文字と申しまして西紀九世紀頃から十二、三世紀頃に用ひられたもので、傳教大師、弘法大師等の入唐僧、つまり日本から支那へ留學せられた方によつて、密教とともに日本へ傳來されたものであり、その字母の數は四十九あります。

その後印度では十三世紀以後になりますとデーヴァナーガリー文字 (Devanagari) が用ひられることになりました。現今の梵字出版に見るものは全てこれであります。

率都婆

次に佛教の中では眞宗を除いた多くの宗派

で、年回法ねんくわぽう要ようなどのある場合、塔婆たふぼと云ふものを建て、供養くやうします。

この塔婆とは正しくは率都婆（*stupa*）といひ、廟、靈廟、塚等と譯します。元來は死者の遺骨や遺髪等を葬り、その上に土を盛つた墓のことでありまして、就中、佛教では佛德を稱へるために、釋尊の滅後十の大きな塔が建立されたのが初めてあります。その後、前に申しました阿育王が釋尊のみ教を弘めるために、諸國に入萬四千の塔を建て、供養してゐます。ともかく、此の意味の率都婆が轉化してあの木で造られた塔婆になつたのであ



士博來雲原荻

ります。だから、あの塔婆は亡き父や母の
 佛おぼへをしのばすものであり、塔婆を粗末そまつに扱
 ふことは私達わたちに關係かんけいのある亡き魂たまを粗末そまつに
 することにもなります。

そこで塔婆は別の圖に示してありますやうに、人體の五部に形どり、表には人體構成の要素たる地水火風空を表はす文字として、

ア
イ
ウ
エ
オ

の五字を書
いてキヤ、

カ、ラ、バ、アと讀みます。裏には大日如來、
即ち毗盧舍那如來の種子であるところの、
(錢)といふ字を書き、これ

と宇宙の原理たる法身毗盧舍那如來との一體不二なることを示すものであります。又

このやうに點を三つ書くこともありま
す。これは伊字の三點と申して、佛教
僧の三寶を表はすものであります。或ひは、
と書くこともあり
ます。これはブラ

ドワン、ダ、ドハと讀みます。これをローマ

(形)
圖
半月
三角
圓
方

(表) 人

……空頭……
 ……風首……
 ……火胸……
 ……水腹……
 ……地腰下……

(裏)



字になほして見ますと、*"pra dhvanda*

dhia, となります。 「ブラ」とは随求菩薩、ずいせうぼさつ

「ドワン」とは破壊菩薩、詳しくは惡趣破壞

菩薩を表はし、「ダ」とは施を、「ドハ」とは

界かい、
詳くわしくは法界はふかいで、「ダ、ドハ」は法界はふかいに

施すといふ意味であります。

それから此の塔婆の形について少し申しま

せう。形かたちは一番上ばんうへが團だん、二番目にばんめが半月はんげつ、三番さんばん

目が三角、四番目が圓、その下が方彫となつ

て居ます。これは上かゝ、人間の頭、首、胸、腹

腰下と云ふ順になつてみます。そしてそれが

空風火水地に配されるわけであります。

尙これは餘り必要のないことかも知れませんが、角塔婆の頭の四面に書く梵字は次のやうに書きます。序だから御参考までに示して置きましょう。

正東、發心
南、修行
西、菩提
北、涅槃

このやうに塔婆によつて表はされてゐるものは、單なる亡者ではなく、如來に攝取せられ、如來と一體となつた精靈を表はすものでありますから、おろそかな扱ひ方はいけないことと思ひます。

訖利訖



位牌の頭によく書いてある字です。古來これをキリクと讀んで居りますが、

正しくはフリーヒ(Freehi)と發音すべきであります。これは阿彌陀如來の種子で、その字の意義は「慚」と云ふことであります。これは昔から「慚愧」と二字一緒にして使ひますが、この「慚」といふのは罪の自覺から出る

内面的な、そして又自心的なものを云ふのでありまして、「愧」といふのは罪に對する報ひの恐ろしさを云ふのであります。それなら何故にこの字を阿彌陀如來の種子として用ひたかと言ふことを、『理趣經』の釋によつて説明しますと慚は凡ゆる善心に相應するもので、慚が伴はぬものは善心とはならぬ。慚とは善不善の標準となるいはれがあるからである。と云はれてゐます。つまり、阿彌陀佛のお慈悲の絶對なることを表はしたものであります。

『心經』の咒

『般若心經』とは、『般若經』の心臓とい

ふことで、數澤山ある般若部諸經典の要點を纏めたものであります。この『般若心經』の一番終りに、

揭諦 揭諦 波羅揭諦 揭諦 波羅揭諦 菩提薩

訶

といふ咒文があります。何だか解らぬやうな言葉ですが、これも梵語です。この咒文に限つたわけではなく、まだ澤山の咒文がありまして、お寺の住職がよく讀んで居られるのを聞かれたことがおありのことと思ひます。だが、こんな咒文はなにも皆さんに分らないやうに、わざとそのまゝ讀んでゐるのではないのです。咒文は密語と

यत् यत् परमं परमं
यत् स्वादा 揭諦 揭諦 波羅揭
諦 波羅僧揭諦 菩提 薩 訶

デーヴァナガリ文字、心經の咒

も云はれるほどで、その短い文句の中に含むところの意義が多く、又深いから翻譯せずにそのまま向ふの言葉を使つてゐるのです。即ち表面の意義は明瞭に解つたやうでも、その裏面に含まれてゐる深遠な教旨が、とても短い言葉で言ひ表はされないからです。咒文に限らず、普通の言葉でも譯して却つて解らなくなつたり、又その意味をはきちがへたりするやうな場合には、譯さずにそのまま使ひます。阿彌陀佛と云ふ言葉の如きもその一例であります。

さて、『心經』の咒文の意味は、
行ける、行ける、彼岸に行ける、立派に
彼岸に行ける、菩提よ！ スワーハー

と云ふことになります。「スワーハー」は、「善く説かれたり」と云ふ字義で、婆羅門が神に供物を供へる時に稱へる咒文の最後に用ひられる言葉で、「間違なく、然あれ」と祈りをこめた言葉であります。これを日本風に

我れも渡らん、人も亦
いざ渡りなん、彼の岸へ

普く共に渡りなん
かくて覺の道なりぬ
と譯したものもあります。

むすび

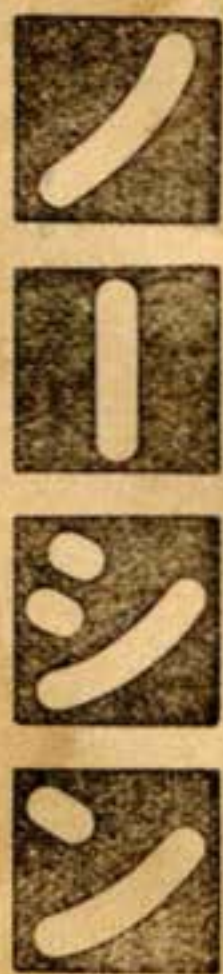
とにかく、かうした梵語が盛に研究されるやうになりましたのは、日本に於ては明治以後であります。かくして今では各佛敎大學で梵語、パーリ語の講座が開かれ、帝國大學あたりでも研究されるやうになりました。又歐

米各國の第一流の大學でも、東洋學の講座の中に梵語、パーリ語があり、その研究はなかく盛んであります。このテキスト、即ち原本は佛敎の書物でありまして、彼等は言語を研究するかたはら、自然と佛敎の研究が出來、更に進んで佛敎の信仰にまで入るやうになり、自ら佛敎の宣傳につとめてゐる者もあるほどであります。これはつまり言葉としての梵語やパーリ語の研究が齎した大きな收穫と申すべきであります。

純正頭腦藥

最も進歩した

頭痛に



頭痛に一番
迅速に無害

頭痛で頭がワレレ程カンカンしたり、眉間の邊りが計で刺される様にチクリチクリと痛んだり、又頭痛と進行がなくとも、何となく頭が重くてボンヤリしたり、クシヤクシヤしたりイライラしたり、或は過度の讀書、執務、裁縫、徹夜、映画、觀劇後等で心身の疲勞を感じた時等、スグに「ノーシン」を服用せられよ。今ノーシンをのんだ事さへも、思ひ出さない程キレイに痛みは消え失せて、それこそ暗闇から抜け出て來た様に頭はハツキリと明快になり、思ふ存分、愉快に、事務勉強、讀書、家事、裁縫等を續けることが出来る。論より證據スグ試みられよ。藥價は三十錢、五十錢、一圓。全國の藥店やデパート藥部にて販賣す。

町京區東市屋古名 社會名合郎太長川荒 元造製

……法然上人をめぐる人々……四

阿波助入信由來記

佐賀一海

法然上人の庶民教化に關する法話を蒐めた大抵の書物の中には、陰陽師阿波介の例を引いてゐる。「勅修御傳」の第十九の傳ふところによれば、或時、上人は自分に給仕して念佛する心をろかな陰陽師の阿波介を指して、

「あの阿波介が申す念佛と源空が申す念佛といづれがまさるぞ？」

と弟子の聖光房に訊ねた。聖光は師匠の日頃の教へでは區別がない筈だと思つたが、なほ所信を確めようとして、「どうしてお師匠さまの申さるゝお念佛と同じわけがありませんか。」と答へた。すると上人は景色を變へて、

「されば日ごろ、淨土の法門としてはなにごとを聞かれけるぞ。あの阿波介も佛たすけ給へとおもひて南無阿彌陀佛と申す。源空も佛たすけ給へとおもひて南無阿彌陀佛とこそ申せ。更に差別なきなり。」

と仰せられた。この阿波介がつねに二連の念珠を手にし、一方で念佛を申し、他方で數をとる様を見て、「阿波介、きはめて性鈍にその心をろかなれども、往生の一大事心にそみぬるゆゑに、かゝる事をも案じ出でけるなり。まことにこれたくみななり。」かう上人は彼をいたはつてゐる。しかし、陰陽師阿波介については、それ以上の事蹟らしいものはどの書物にも見當らないやうである。尤もこれは當然である。ナポレオンの傳記作者が、彼の食事の給仕をした從卒の一人の略傳をものしなかつたのと同様である。

たゞ、——律師隆寛の著と傳ふる「法然上人秘傳」の中には、京都伏見の阿波助の事蹟が細に記されてゐる。それによればこの阿波助は、法然上人の御名代として東大寺の勸進をつとめた醍醐寺俊乗房重源が罪障消滅の札を諸人に分ち與へた時、姿を變へ或は人を遣

はして七日間に七枚の札を手に入れたが、八日目の朝それらを見直すといふ筈の葉にかはつてゐたといふ程の罪障深い、貪欲この上もない男であつた。放逸邪見で、人が左といへば右と云ふすね者であつた。ところが、彼はまた極めて富貴長者であつて七人の妻を絶えず身のまはりに置いて、權者を氣取つてゐた。

然し後年、この阿波助は熊谷蓮生房其他の近侍する法然上人の庵



室をたづね、上人自らの御剃刀を頂いて出家入道し、櫛の下に畏んで上人の淨土の法門を七日聽聞して歡喜踊躍身の置きどころも知らなかつたと云ふ。そして再び家に歸つて妻子の姿を見、財寶を見れば必ずしも妄念が生らぬとは限らない、かう彼は心にきめて使ひの者を遣つて七人の妻に全部の財を預つて家を處理し、自分は東への道を辿つたが、遂に平秀衡の建立にかゝる光り堂で端坐合掌、西に向つて念佛百遍ばかり申して往生したと云ふ。村里の男女が往生人結縁のためにと葬送すれば、遺骨みな水晶の珠の如く光を放つたと結んでゐる。――

この阿波助が、さきに記した阿波介と同一人であるかどうかは知らない。またその穿鑿は殆ど無益に近いわざであらう。たゞこの阿波助を記して比較的詳細な「秘傳」の作者は、前に書き落したが、阿波助の求道の動機について次のやうに述べてゐるのを考へてみよう。

「彼の阿波助が或時播磨の國浦子と云ふ所へ行くとして路に迷ひて三日の路を七日に着く。この阿波助たちまち道心發り今生にて路を行くにも先達なきには迷ふなり。まして淨土の路には知識あらでは叶はじと思ひてこのあたりに法然上人云々。」

この文章に従へば、七人の妻を具して貪欲飽くところを知らなかつたといふ阿波助も、旅路に迷つて忽ち發心したわけである。世は平安末期から鎌倉時代へかけての諸行無常、有爲轉變の慌しさを

強く色彩つて、如何なる者にとつても安穩無事であることを許さない。だからこの強慾阿波助も旅に出て、いつか時代の風を身にうけると、心の不安をどうすることも出来なくなつたのかも知れない。

かう解すれば彼の突然の回心も一應の理が立つであらう。しかし、諸行無常の世は同時に人々を安逸と弛緩の波の中に抛つて、眼前の慰安に日々の満足を見出させることもまた眞理である。かういふ人にとつては、何か身近かに奇蹟に似た事柄でも起らない限り、容易に求道のこゝろを獲得出来ない筈である。そこでわたしは「秘傳」作者の記す「……路に迷ひて三日の路を七日に着く。この阿波助たちまち道心發り今生にて路を行くにも先達なきには迷ふ……」の文にわたし自身のパラフレーズをほどこして、阿波助入信の由來を描いてみようと思ふ。――

その頃、播磨の國の薄っ原を一人の旅人が足早に歩いてゐた。年のころ四十餘りと見うけられるが、脊にくもりつけた垢じみた風呂敷包みのほかは持物とてなく、素足に草鞋を穿いたその指の叉には血がにじんでゐる。たゞ六尺近くの頑健な體軀と腰に差した刀劍から推すと、粗末な衣服は兎も角としてどうやらどこかの里の郷土らしい様子に見えた。太い迫つた眉の下のつぶらな兩眼を、さつきからくるくと四方に配つてゐる。路に迷つたものらしい。もう夕闇がひろがつてゐた。

ふと旅人は立ちどまると、ほつと安堵の吐息をした。向うの山裾の茂みのあたりに、微かな灯のいろがぼつんとひとつ眼に映つたからである。

それから暫く經つて、件の旅人は雜木林のはづれにたつた一軒取残されたやうな荒ぶれた大きな家の戸口に彳亍してゐた。

「お頼み申す。」

間を隔いて再び聲をかけると、案外素直に、

「お入り下され。」

若い女の返事が中から聞えた。

上り端に仕切つた爐の傍らで、瘠せ衰へた娘が一人、振向きもせず粗朶を手折つてゐた。

「路に迷つて難澁する者、宿をお願いいたしたい。」

娘は黙つてうなづいた。旅人は腰に挟んだ手拭で足のよごれを拂ひ落すと、窓の明りの下にどつかと足座をかいだ。だだつ廣い家中は煤け放題の始末で、これと云つた調度らしいものは何ひとつ見當らない。そのうへ娘ひとりの住居らしいのが、だんだん彼を不氣味な空氣に誘ひこんで行つた。

娘はやがて古びた器に白湯を汲んで旅人の前に運んだ。が、そのまま爐端に戻つてちつと俯向いたきりであるところを見ると、どうやら飯の支度の出来兼ねることを旅人に示してゐるやうだ。娘は一言も口をきかなかつた。

やがて旅人は風呂敷包みを開くと、娘のはうを用心しながら食ひのこりの握り飯を膝のうへに置いた。彼は

ぼんぼんと胴巻のあたりを叩

いてほくそゑんだ。さう

して茶碗を片手に、し

づかに飯を嚙りだし

たのである。

……娘は何かを

ためらふやうに、軽い

吐息の音を立てた、しかし

旅人の食事する氣配を感じる

と、つと立ち上つて奥の暗い片隅

に消えて行つた。

「夜具もないのか。」

旅人はかう呟いて、いましましさに口の端に

ついた飯粒をひねつてゐた。暫くすると、何かを稱へ

るか細い静かな娘の聲が、奥の方から彼の耳に流れこんで来た。

引きよせた刀を手放すと、

「ちえッ！ 當世はやりの念佛か。」

彼はふたゝび呟いて苦笑した。「しかしおかげで、狐狸の宿ではな



ささうだ。」

不安が一掃すると、彼は急に眠くなつて來た。……

翌る朝、陽の光をいつぱい顔に浴びながら旅人は眼を覺ました。

昨夜の娘はもう爐端にかしこまつてゐた。彼は豫定の旅路を思ひながら、娘の挨拶をうけると禮を述べて匆々に出發しようとした。すると、娘はもじもじしてゐたが、やがて思ひきつて、

「すこしお頼みがございます。」とはじめてはつきりものを云ふのであつた。

「頼み？——お、忘れてゐた。」

旅人は承知した様で、幾許かの小錢を娘の前に差し出した。

「ほんのお禮のしるし。」

然し娘はそれに手を觸れやうとしない。

「わたくしのお頼みとは、あなたさまの所持なさる金千兩を戴きたいのでございます……」

瞬間、旅人はぎよつとした。この突拍子もない娘の申し出を、どう裁いてよいかわ彼には皆目見當がつかかなかつた。

「金千兩？」

「はい、實はその金こそわたくしの亡き母の片見のはずでございます。」

「ところが千兩は愚か、十兩のかねも持合せてをらんとしたら？」
平生の自己を取り戻すと、旅人は亂心してゐるらしい娘を、怒り

と嘲りの眼差しで見下しながらゆつくり云つた。

「いえ、いえ、そんなわけがあらう筈がございません。」

すると今まで堪へてゐた涙を一度に堰破つて、娘は泣きじやくりながら旅人に訴へて來た。

「わたくしは生まれ落ちるとからずつと母と二人きり、この家で過して來たのでございました。母は亡くなりました折、幼いわたくしを枕邊に呼んで云ひますには、わが亡きあともそなたは決して他へ出ずにこの家にあつて一人暮しをせよ、今より十年経つてその月にこゝへ旅人來つて宿りをされやう、その旅人こそはわが金千兩負うて來る筈ぢや、そなたはその金を受取つて支度の品を整へて、他へ嫁いで立派に暮すのぢや。それにつけても、一日とて有難い法然房さまのお教へのお念佛を怠りなきやう、もしお念佛申すことを怠れば十年経つても金は戻らぬゆゑ用心せよ、と繰返し遺言したのでございしました。なほその折母が附加へて云ひますには、その旅のお方は姿は如何やうなれど世に得難い易占ひの師であると念を押したのでございしました。それ以來わたくしは母ののこした諸道具類を僅かづつ賣り拂つて暮しを立ててまゐつたのでございますが、今年になつてもはや賣るべき何ものもとてなく、今日の來るのを死ぬ思ひでやつとすごしてまゐつたのでございます。……あなたさまはその占ひの師とお見うけいたしますが——」

いつか娘の言葉に聴き入つてゐた旅人は、この時ふつと口のあた

りに狡猾な笑みを浮べると、

「いかにも仰せの通り。また金のことは誠ぢや。」

かう答へて彼は暫く眼を瞑つて何か思案にふけつてゐたやうだが、眼を開くと一段強い聲を張り上げて娘に云つた。

「その隅に一本不用の柱があるやうぢや。その柱を敲いて空虚な響きのする箇所を壊したならば、母御の金出づるは必定と易にある。」

悦び勇んで柱に立ち寄る娘と、戸口の土間に飛びのいて、娘の悲歎の叫びをうけたら直ちにそとに走り出る身構へを旅人が構へたのは殆ど同時だつた。……

一とき、ふたとき、柱を削る娘の手がはたと止ると、急に甲走つた聲が、

「あつた！ 在つた！」

と家中をどよめかした。ぐつと息がつまつて、娘の手許に射走つた旅人の視線には、金の一枚一枚が後からあとから重なり合つて、あたり一面に流れ散るのが映つた。

「うれしや、うれしや、これも母の云ひつけを守つて日頃相續するお念佛の功德ぢや、功德ぢや……」

狂氣する娘の足元に、よろ／＼と腑抜けになつたやうな身體をのざりよせた旅人は、

「お念佛の功德ぢやと？ お念佛の功德ぢやと？」

顰蹙返しに眞似てゐたが、

「そのお念佛の功德を教へる御房は誰ぢや？」

「法然さまぢや。」

「法然房……法然坊……」

彼はまるで憑かれた者のやうに、その名を何度も繰返してゐた。……

この旅人が直ちに上人の御座を目差して行つてからのことは、「秘傳」の作者のものした通りである。

涼 味

三曉庵雜志にある話。橋本某なるものが、江戸から六月歸宅の節、金谷の坂の上で大長持を擔つた四人の人足に會つた。荷を下して瀧のやうな汗を拭ひながら、「良い風が吹いて涼しいな」と話しあつてゐた。とその中の六十ばかりの老人が。

『いつでも骨のしんから汗を流さにや、涼しいなんてことは解るものぢやねえ。』

と語つた。これを聞いた某は大いに悟るところがあつたと云ふ。

彼岸への志向

— 佐藤 賢順 —

暑い寒いも彼岸まで、と言ひます。「お彼岸でも過ぎたら」など、言ひます。

長いこと暑さにだらけてゐた心持も、日に日に加はる爽冷さに蘇り、暑熱と埃にカサカサに赤ちやけた樹や草も、この期節から急に生き生きとしてくる。春は春で、火鉢の傍や爐邊でちぢかんでゐた不精者も「サア一つ……」といふ氣になる。霜に雪に虐まれて黒土の下に待ち構へてゐた「大自然の目」が一瞥に開いて、太陽へと身體を、手を、足を伸す。何かしら人はこの頃を轉換期として、氣分の更新を感じ、計畫を立てたり、新たな心構をしたり、方向を指したりするものです。

彼岸會は、言ふまでもなく、春分秋分を中心としての一週間であるが、その頃には太陽が眞東から出て眞西に沈む。「お中日にはお日様はくるくる舞ひ乍ら嬉しさに極樂のある眞西に沈むのだよ」と、祖母からよく聞かされたものです。人の心は太陽を追つて西の御國へ向ふ。良き國土への憧憬、より良きものへの望み。此處でな

く、あそこへの願ひ、彼岸の頃には、誰しもさういふ心持にならずにはゐないでせう。

彼岸會は印度、支那にはなかつた行事であるが、我が國の聖武天皇の頃から始まつて、止惡修善を目的とした佛事であると傳へられてゐます。「大智度論」の、

「生死を此岸となし、涅槃を彼岸となし、煩惱を中流となす。菩薩無相の智慧を以て禪定の舟船に乗じて生死の此岸より涅槃の彼岸に至る」といふ到彼岸の精神に、即ち大理想實現の抱負に基くものです。

人は誰でも「この儘」に満足するものではないでせう。何かの理由で餘程弛緩した精神の持主でない限り、屹度彈力を持つてゐる。押さへられても跳ね返へる。こゝで、今ある有様で満足しない。あそこへ、未だない有様を志向する此岸から彼岸へ。生命の奥底から湧き出るやうな慾望、慾求、理想。これによつてこそ現實は可能を實現し、生活には躍進があるのです。

然し、願つて考へてみます。慾望とか理想とかには何か段階がありはしないか。彼岸といつても、誰の考へてゐる彼岸も一様でせうか。

通常、人間には精神と物質との二面があると言はれ、人は靈と肉とから成り立つてゐると言はれてゐます。然しかう截然と二つに分けられるかどうかは、甚だ疑はしく、そしてこの分け方は極めて大

ざつばな言い方であるが、截然と二つに分けた何れかに人間の眞の姿があるのではなく、寧ろ分けられない所に人間の人間性がある。別の言ひ方をしてみます。私が私自身を顧みる時、過去を思ひ出したり、現在を意識したり、未來に希望を持つたりする。つまり私は時間の中に浮いてゐる。私は濃度を持つてゐる。幅はないが厚みがある。然し私が他人を眺める時には、様子がこれと違ひます。他人が全く未知の人であるならば、机や家や木や山や草と餘り變らなない。空間の中に擴りを持つ一つの存在である。厚みはないが幅だけがある。早く言へば、前の場合は主観、後の場合は客観である。主観だけの人間もなく客観だけの人間もない。主観と客観との結び付きに人間の人間たる所以がある。意識としての主観が自然的存在としての客観と融合合ふ所、主観が客観に或る立場を取る所に人間があるのです。であるから、その立場の取り方次第で展望は廣くもなり狭くもなるのです。扇子を擴げてみる、要の所は主観、扇面は客観とも譬へられる。要の間け閉ち一つで扇面の展望は大きくもなり小さくもなる。人間が物質や自然的存在に——つまり感覺の對象となる存在に交渉を持つのは、丁度それと同じです。

或る立場を持つといふことは、結局客観に對して欲望を持つ、理想の實現を意圖する第一歩に外ならないのです。客観と交渉を持つからこそこれを何とかしようとの希望が起る。すなはちそこに一つの此岸性から彼岸性への動きがそゝられるのです。

然しその欲望、理想と言つても色々でせう。或る人はまるで主観が客観の中に融け込んでしまつて、まるで石か金のやうな存在になる。地獄とはかうも言へませう。少し主観が勝つたとしても胃袋か腎臓のやうな存在になる。これは餓鬼とも言へるでせう。かういふ低度のものから段々主観の濃度が強くなつて、欲望とか理想とかいふものは、プリズムで分光した光のやうに、色々のニュアンスを持つてゐる。死んでもたゞつてやるといふ憎惡に燃えて仇敵に對する時と、目に入れても痛くないといふ慈愛から兒孫に對する時とは、その間に格段の相違があります。

物質や客観に融け込んでしまはずに、却つて客観の上に充分に主観を實現してゆくところに理想實現の意味があるのです。勿論主観と言つたところで、主観は皮膚によつて限界づけられ個別的な我ではない。前にも述べたやうに、そのうちには無限の過去も現在も未來も含まれてゐる。様々なものゝ作用の中心が主観である。であるから客観の上に主観を活かしきると言つても、自我の專擅ではなく、まるでその反對の事柄です。

「煩惱を中流となす」といふ『大智度論』の一句は面白い句です。客観に把へられてゐる状態から、例へば貪慾とか性慾とか財慾とかのみに把へられて、それを満足してゆく欲望、欲求の状態から、戒とか定とか慧とかいふ色々の實踐によつて、主観がうつろひ易き客観を支配して、その上に永遠の相を實現してゆく理想の状態まで、彼岸は成長してゆかなければなりません。



好意の結果

朝鮮説話

母三郎著

北林透馬作

1 . . .

國王、或ひは時の爲政者が、變裝して國內を遍歴し、果して民衆が自分の政道に安んじてゐるか何うか、探つて歩く、と云ふ話
は、何處の國にもあるが、これは事實そんな風な所謂「名君」が
有つたのか、或ひはまた、餘りに惡政が続いた結果、民衆の苦し
みが、そんな風な儚い夢を作り出したものか、其處の所は何うも
よく解らないが、とに角日本では最妙寺時頼の「鉢の木」の話は
最も名高く、教科書にさへ收められてゐるほどだし、また水戸黄

2 . . .

門漫遊記など、云ふものも、稗史、小説、講談として、廣く一般
に親しまれてゐるが、中世ヨーロッパ諸國には大抵何處にも同じ
やうな話が傳はつてゐるらしい。
作者は先年朝鮮各地を旅行して歩いたが、御他聞に洩れず、朝
鮮にもやはり、同じやうな話が傳へられてゐる——
李朝第九代成宗王、と云ふと、我邦の足利第八代義政の時代に
當るが、この成宗王が非常な明君で、始終變裝しては宮殿を出て



京城の城内——と云ふのは日本の城下、即ち市中にあたるが——を巡視して、親しく民衆の生活の偽らざる面を見て、己が政道の改良に資した、と云はれてゐる。

大變結構な事だが、日本の大臣諸君、それも政黨出身の大臣など、が、實際上の仕事は何も出来ないの——永年の間政策にばかり没頭してゐた人間に、さう鐵道の事や、教育の事が、即座に理解出来る筈もないが——人氣取りの爲に好くこの「明君」の眞似をしたがつて、ひよこくへんな所へとび出して来るのは甚だ困る。

で、その成宗だが、或晩のこと、いつものやうにコッソリ宮殿を抜け出して、京城の街をブラ／＼歩き乍ら、南山の下まで來た。今この南山には朝鮮神宮があり、天照大神、明治天皇を祀る官幣大社になつてゐるが、此處が丁度城の端れになつてゐる。昔から市場が開け、相當繁華な場所ではあるが、夜更けの事ではあるし、附近の民家は森閑と静まり返つてゐた。

と、路傍のみすぼらしい一軒の家から、灯りが洩れてゐる。——この夜更けに、可怪しいな、と成宗王、近附いてみると、家の中から高らかに讀書する聲が聞えてくる。

「何者だらう——こんな夜更けまで勉強してゐる人間は……」
王の好奇心が動いた。

3 . . .

朝鮮は、中國支那の屬國として、永年の間これに師事してゐた。事實また、古代、中世の支那は、世界に誇る立派な文明を持つてゐたし、我國だつて色々支那文明に啓蒙もされ、これに兄事してゐた事もあるが、朝鮮人の支那崇拜はまた想像以上で、一から十まで支那の模倣のみである。

それにまた、李の太祖が、自分は武官出身なのに、ひどく學問を尊重した。これは、大いに理由のある事で、大體この李太祖と李成桂は、純然たる武官で、好く言へば智勇兼備の大將軍だが言はゞ學問のない武將で、その故に文官偏重の高麗を滅ぼして、自分が國を立てたのだが、これも倭寇——日本海賊——を掃滅したと云ふ功績と、それに依る人氣とによつて、國を取つたので、

その爲に武將を極端におそれ、専ら支那式の儒學を盛んに獎勵した。

結果は、また／＼文官萬能となり、つひに國を失つたわけだがともあれ李朝歷代の王が「學問」を尙ふこと非常なもので、その爲成宗王も、深夜聲高く讀書するのを聞いて、思はず足を止められたわけなのである。

立止つて、耳をそばだてゝ聞くと、周易を讀んでゐるらしい。如何にも奇特な事だ、と思つたので、どんな人物か見たいと思ひ、ほと／＼と戸をたゝかれた。

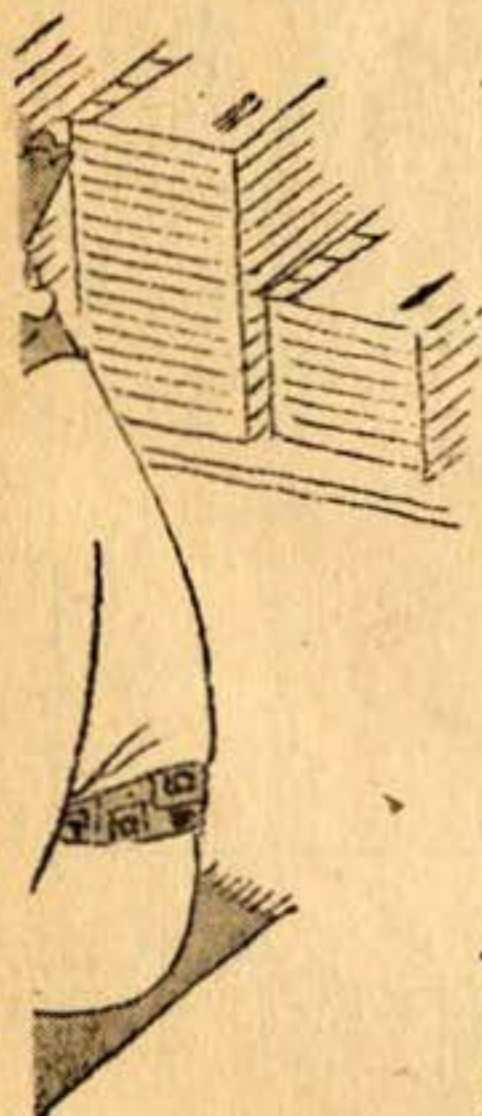
4 . . .

「誰方ですか？ 何か御用ですか？」
戸内から訊ねる聲がした。

「いや、あやしい者では御座いませぬ。」
「こんな夜更けに、お訪ね下さる方のあるわけはありませんが。」

「ふと、此處を通りがゝりの者ですが、思ひがけぬ讀書の聲を耳にしたので、なつかしさの餘り聲をお掛けしました。わたくしも、些か學問に志ある者です。」

成宗王
老學者
會見圖



成宗王



と王が言ふと、中の男も安心したものか
直ぐに戸を開いて、

「それは失禮しました。何卒お遣入り下さ
い。」

と王を招じ入れた。

書齋に通つて、灯の下でよく見ると、
この家の主は、もう六十を越したと思はれ
る、白髪の老人である。

「まことに失禮とは思ひましたが、先生の
お顔を拜見致したく、また御高名をも伺ひ
たく存じまして、敢て聲をお掛け致したわ
けで御座います。」

言ひ乍ら、書齋を見廻すと、ぎつしりと
本が詰つてゐる。

「で、何を御勉強で御座いますか？ 周易
のやうに拜聴致しましたが。」

「仰言る通りです。些か周易を調べて居り
ます。」

「わたくしも同じものを志して居ります
が、浅學卑才、難解の點ばかりで困つて居

ります。幸ひ先生に、御教示を得たい。」

「私とても淺學のこと、到底お教へする事など出来ません。が、知つてゐるだけの事は、お答へ致しませう。」

「では……」

と、成宗王、いろ／＼と周易に關する質問を放つと、立ちどころに老人は、明快な答辭を下す。

成宗は、李朝歴代の王の中では第一流の人物で、まづ學問もあり、識見もあり、學者でもあるのだが、この老人には全く頭が下つてしまつた。

態度と言ひ、識見と言ひ、これは當代一と言つても羞しくない大學者だ、と心ひそかに舌を卷いた。

5 . . .

「色々御教示を得、有難う存じました。これで永年の疑議も氷解しました。」

「いやお羞しい事です。」

「先生ほどの學者が、こんな市井に埋れてゐやうとは意外な事です。何か他に、御研究が有りましたら、是非拜見さして頂きたく存じますか……」

「左様、お見せする程の物も御座いませませんが、些か舊稿を御覽

に供しませうか。」

と言つて取出した、數十篇の原稿。

「拜見さして頂きます」

と成宗王、手に取つて讀んでみると、仲々何うして立派なものばかり。

「いや、全く恐入りました。」

と王はすつかり感じ入つて、

「まことに、當代稀に見る篤學のお方ですな。先生は、何故科擧に應じて、その學識をお現しにならんですか。先生ほどの方が無名のまゝで埋もれて居られるのは、國家の損失と言ふべきです。」

「さう仰言られると、ます／＼汗顔の至りですが、私と雖も決して出世を望まぬ譯では無いので、實は二十歳の春より、科擧の試験には幾回も應じたのですが、まだ一度も登第の期を得ないのです。」

「ほう。先生が科擧の試験に登第されなかつたと仰言るのですか？」

甚だ意外だと言ふ風に、王が言ふと、

「一端志を立てた以上、終に及第の日も無く不歸の客となるのは如何にも残念に思ふのです。今後、あらん限りの努力をして

死ぬまで、幾回でも試験に應ずる決心では居りますが……」
 篤學なる老學研の、この必死とも云ふべき覺悟を聞いて、王は
 自ら肅然と襟を正さざるを得なかつた。
 佐野常世の奉公の誠意に、思はず感涙を流した北條時頼と、甚
 だ酷似した王の心境であつたらう——。

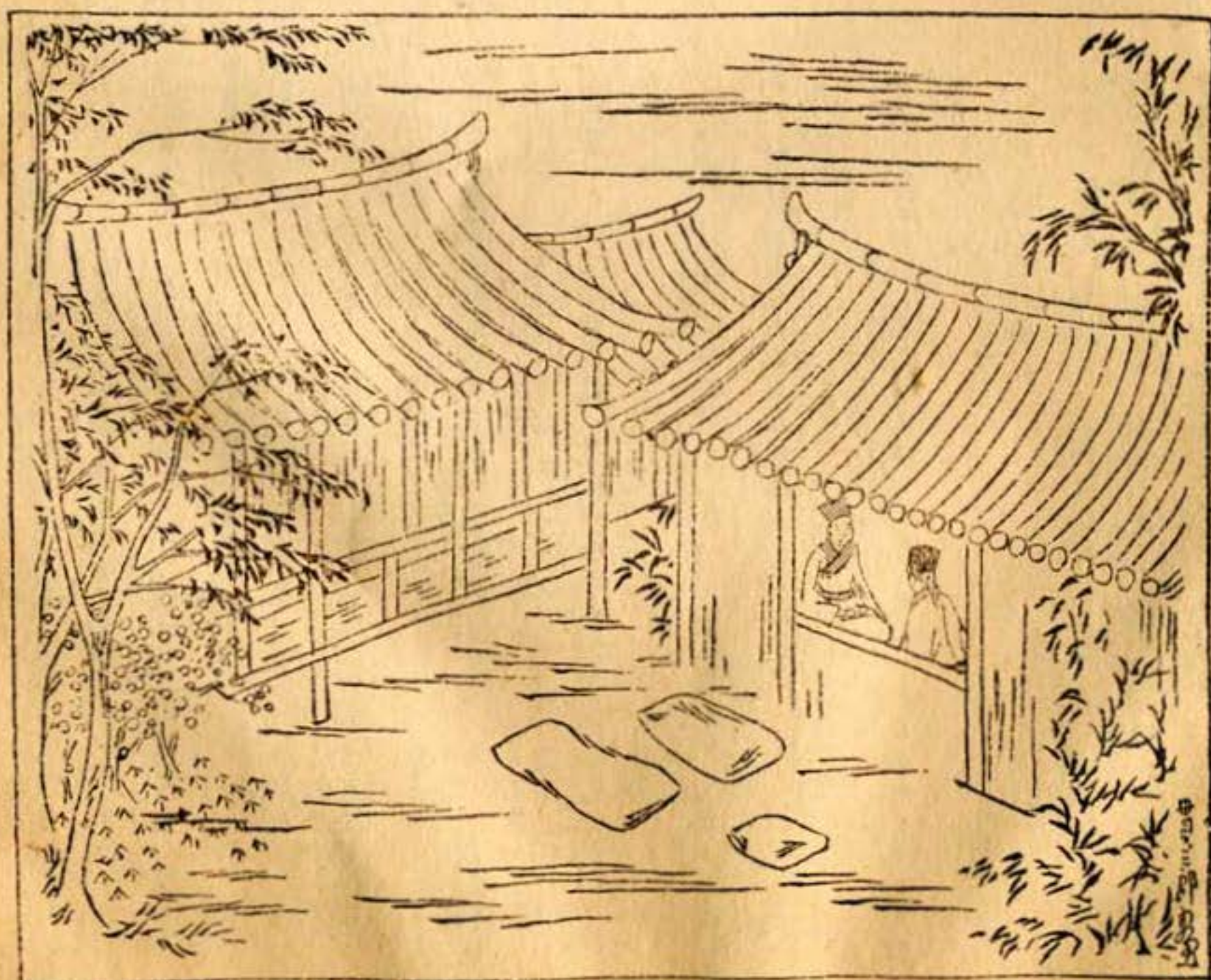
6 . . .

この「科擧」と云ふ奴だが、これも支那の制度を鵜呑みにした
 もので、これに及第しないと、絶対に出世の道が無いと云ふ惡法
 だが、我邦の高等文官任用令だつて、これと似たり依つたりの、
 非文化的な惡法だらう。まだ我邦の場合では、武官にも大いに出世
 の道があり、近頃のやうに軍人萬能の時世には、總理大臣を始
 めとして、まるで文官のお株を奪はれたやうな形だが、朝鮮の方
 では、この武官が全く影が無くつて、文官全盛。——それで、こ
 の科擧の試験に及第しない事には、男子一生、社會の下ずみで暮
 さなければならぬ。

その科擧の試験たるや、この老學者の場合を見ても解る通り、
 必ずしも「實力」が物を言つてゐない。

成宗王、儼然として、

(自分が王位に即いて以來、科擧の試験を二十回餘りもやつてゐ



るが、更に有能の才も現れず、而も斯の如き篤學の士を逸してゐたのは、何と云ふ羞しい事だらう。

と心に思ひ乍ら、

「御決心を伺つて、ますく感じ入りました。聞く所に依ると、近くまた科擧の試験が行はれるさうですが、お受けになりますか。」

「近く試験があるのですか。ちつとも知りませんでした。いや、それなれば早速受けてみませう。」

と老學者は、眼を輝したので

「今度こそは、必ず御及第になるやう、お祈りします。」

と丁寧に挨拶して、王はその家を辭した。

——これで、この學者が王に召し出され、大いに朝鮮の國事に力を致した、と言ふ事になると、甚だ結構なのだが……。

7・・・

翌日になると王は、俄に臨時科擧を施行する、と云ふ公告をした。

同時に、老學者に力をつけてやらうと、家來の者に命じて、白米一升と、肉一斤を秘かに老學者の家へ送らした。

臆て試験の當日となれば、城の内外より集る者數千。みなこの

試験に及第して、大いに出世しやうと云ふ青雲の志をいだいた若い者ばかりだが、中に數十名の老人も混つてゐた。

試験も終り、集つた答案を王が一々眼を通して行くと、果して先夜老學者の家で讀んだ名文が現れて來た。

「これだ。」

はた、と膝を打ち、即座にこれを首席と定めて、及第の通知を出し、同時に答案の主を召し出した。

最明寺時頼と佐野常世の、鎌倉幕府でのドラマチックな會合にも比すべき、この日の會合……で有るべきなのだが、召しに應じて宮殿へやつて來たのは、先夜の老人とは似もつかぬ年若い少年であつた。

王、甚だ不審に思つて、

「これは汝が書いたものに相違ないか。」

と答案を示すと、

「書いたのは私に相違ありませんが、文章は私の作つたものでは有りません。」

「では、誰のものか。」

「私の老師が、日頃から科擧の試験に及第したい、及第したいと云つて居りましたので、老師の志を繼いで、私が老師の文稿中より拔萃して書きましたもので御座います。」

「老師は、何故自身で應試されなかつたのか。」

重ねて、また訊かれて、少年はハラハラと涙を流し乍ら、

「二昨夜、何者とも知れぬ方から、美味しい肉と米を頂きまし

たので、老師は幾十年ぶりかで、こんな美味しいものを喰べた爲

思はず喰べ過したのでせうか、俄かに腹痛を起し、重態となりま

したので、遺憾乍ら私が代りに出頭致しました。」

「なに？ 美味しい肉を喰べ過ぎた爲に、重態になられたと？」

「はい、もう今頃は、不歸の客となられてゐる事でせう。」

これを聞くと、王はさすがに、何かに強く胸を打たれたやうに
默然と考へ込んでゐたが、繼て、

「さうか。」

と一言、吐くやうに言つたまふ、默つて座を立ち、奥へ這入つて行つた。

……と云ふ、これだけの話であるが、何か一應の寓意のうな、朝鮮らしい話ではないか。

吉田貫三郎畫

頼もしき鳥人

『もしく社長でいらつしやいますか。』

今夜クリーブランドへお立ち下さうです

な。それなら飛行機で行くに限りますよ。

飛行機つて物があるのに、のろくさい汽車

なんぞに乗る必要があるものですか。私

なら飛行機にしますな。いゝや、アルゼニ

ー越えなんか朝めし前でさ。危険ですつて

？ 笑談じやありませんよ。あの航空路の

パイロットはニューヨークからシカゴ迄の

樹の枝なら一本一本知つてゐるつて位ゐ

すからね。なに、エンジン？ そんな心配

は御無用ですよ。エンジンが止まるなんて

ことは、スキツチを切り代へた時だけに限

るんですからね。兎に角旅行を愉快にや

るには飛行機に限りますよ。

何んですつて、社長？ 私にも一緒に

行けと仰つしやるんですか。オーケー勿論

行きますとも。……だが一寸お待ち下

さい。御覽なさい。西北から雲がかぶつて

來ましたぜ。彼奴は確かに嵐になります

な。大嵐になつちや飛行機も飛べないで

しやう。出發をお延しになる譯には行かな

いんですか。あゝ駄目ですか。では汽車の

切符を買つて置きませうか。えゝ、案内所

に友人がをりますから。はあ、承知しまし

た。私は何時も言つてゐるんですがね。

旅行を愉快にやるには汽車に限るのに、飛

行機に乗るのはどうかと思ふつてね。

諧談傳記

獨身醫師の

生涯

山中峯太郎

小島一鶴画



▽貧乏ぢやないか

——お母さんよりも間に合ふ、といふ機械で、眠つてしまつたお父さんを眺めながら、春彌は、お母さんを思出した。本當のお母さんは、『八重子』といつて美しいお母さんだつた。今家にゐるお母さんは、その後に来た人だ。けれど、やはり良く可愛がつてくれる。本當のお母さんは最う亡くなつたのだ。お父さんは酔ふとフラ／＼になつて困る。機械に掛かつてグウ／＼と眠つてゐる。

そのお父さんの篤治先生は、翌日に高知の家へ、春彌と一緒に歸つてきた。藩主の御典醫として、その後も羽振を利かしてゐたが、酒に祟られて中風となり、まだ四十八歳の働き盛りで亡くなつた。春彌はまだ十四歳、お父さんを失つて家は衰へ初め、遂にはお母さんと一緒に足袋縫の内職までするほど落魄れた。すると、『春彌君、居るかの。足袋縫を手傳つてやらう』聲をかけて颯爽と入つて来るのは、青年志士の坂本龍馬、亡くなつた篤治先生と勤王の大義を論じ合つた仲である。ド

カリと上りこむと、春彌の足袋縫を切々と手傳つてくれる。

なか／＼器用で上手に縫ふ。針を手早く遣ひながら、

『偉くなれよ、春彌君、これから日本の時勢が變つてくるぞ、宜しく志を立て、天下を動かす人間になれ！ さて二十足縫へた。また来るぞ』

細い眼で微笑して立上ると、スツと出て行つてしまふ。春彌は、この坂本龍馬が好きになつた。『天下を動かす人間になれ！』いつも言はれる、それが十四歳の春彌の胸に、グツと深く浸入つた。

ところが、日に／＼家は落魄れて、お母さんは土佐郡小高坂の生家へ歸ることになり、春彌は安藝町の伯父さんの家へ引取られた。來てみると、幽霊の繪がまだ有る。が、女は一人もゐない。障子はボロ／＼に破れ、疊は剥げてゐる。伯父さんの自分も、まるで汚くて、傍へ行くと垢臭い。そのくせに病人は多勢きてゐる。

『先生、それでは何うぞお藥を、幾日分でもお願い申しませう』

診察の済んだ顔の蒼い病人が、伯父さんの順吉先生に、ベコ／＼しながら願つてゐる。すると、垢臭い伯父さん先生が、怒鳴りだした。

『お前は軽いんだ。そんな胃病なんか、物を食ふ時に良く嚙んで、ドシ／＼働けア治る、藥は遣らんよ』

『へエ、けれども、お藥を頂きませんと、心細うございまして』

『阿呆なことを言ふな』

『ウヘエ、どうも、……？』

『心細いなんて考へるから、胃病に負けるんだ。藥は遣らんよ。さア次の病人は誰だな？』

『私でございませう』と、次の順番の若い男が出てくると、

『何だ、若い癖に病氣をして、親不孝だぞ。胸を開けろ』

まるで伯父さん先生は怒つてゐる様だ。診察が済むと、今度は藥が要るらしい。傍にある藥机の上から、散藥の瓶を三つ前に並べて、匙を突込んだ。秤が前に有るのに見向きもしない。いきなり鉢の中へ瓶から投入されると、三色の散藥を掻廻してゐる。目分量の調合だ。春彌は見てる中に驚いてしまつた。——お父さんよりズツと亂暴だ？ と思つてると、伯父さん先生が不意に左手を伸ばした。と、横にある障子の紙をメリ／＼と破り取つて、机の上に廣げると、鉢の藥をザラリと移した。

『出來たぞ、藥が、これを持つて歸つて六つに分ける。飯

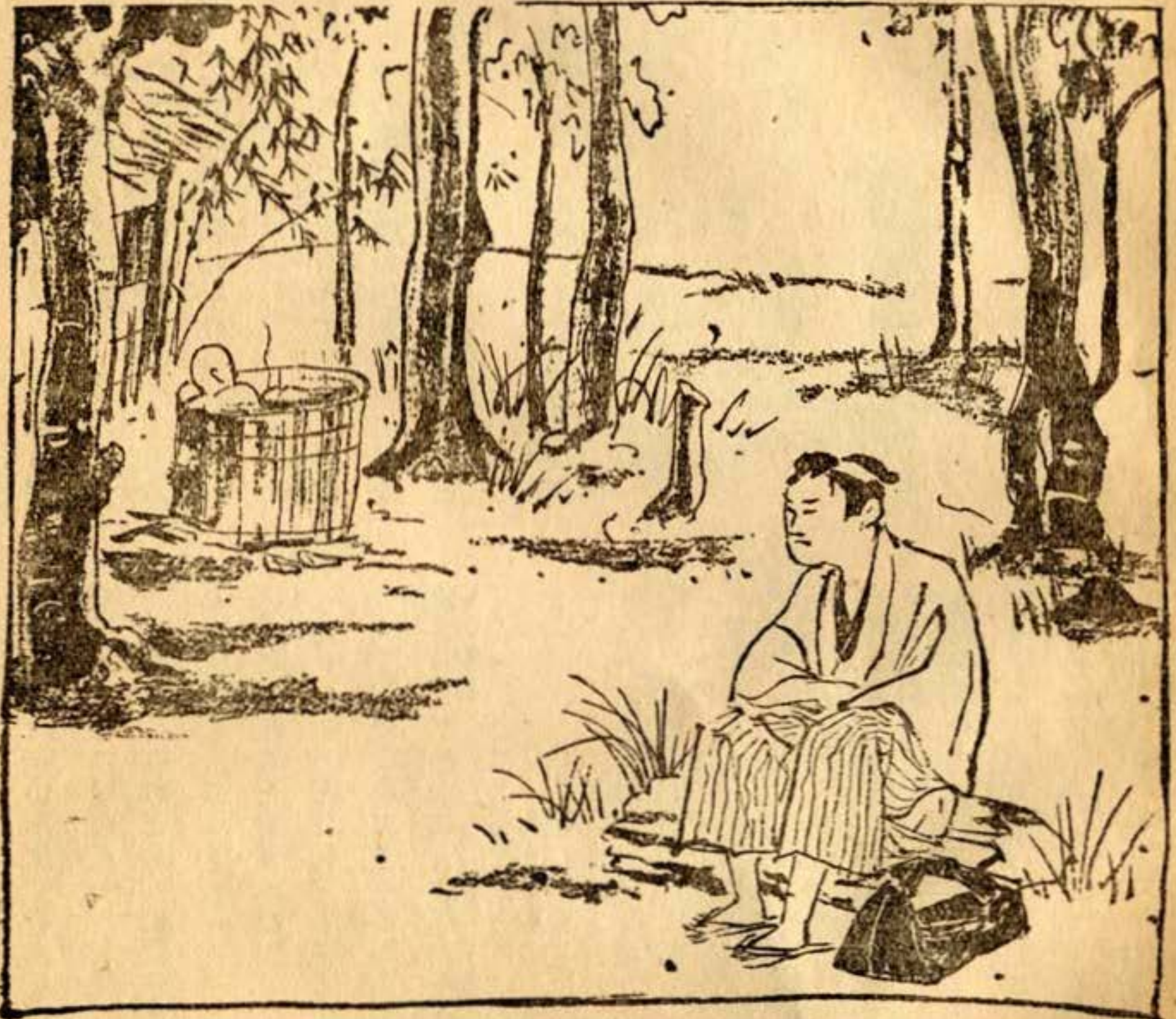
を食ふ前に一つ宛飲むんだ。二日分だぜ」と、言ひながら、障子紙に包んだそれを渡すのだ。

『有難う存じます、では、二日したらまた伺ひますので、どうぞ宜しく』と、若い病人が兩手に障子紙を押戴いてる。

『さうだな、二日位ぢや治るまい。また来て見せろ』

伯父さんは威張つてゐる。春彌はいよくピツクリしてしまつた。そこへ隅の方から、お百姓のお爺さんが、おそろく出て来ると、

『先生様、こなひだは孫めが長い病ひを治して頂



きまして、ハイ、何とお禮を申上げまして好しいやら、これはもうホンの志でございですが、そのお藥代を、……』と、懷から紙の包を取り出した。すると、『なに？』伯父さんが太い眉をしかめた。

『あの、お藥代を持つて参りましたんで』

『餘計なことをするな、お前の家は貧乏ぢやないか。知つてるぞ、己は』

『へエ、先生！ けれども、これは』と、お爺さんは紙包を、いきなり机の上に置くと、そのまゝ玄關の方へ慌てて出て行つた。

『こら、待て！ 甚平、待たんか』

先生に怒鳴られて、甚平爺

さんは、ます／＼慌てながら外へ出て行く。

『怪しからん奴だ？ ……春彌、これを持つて今の甚平に歸してこい。取らなかつたら、家へ行つて投込んでこい？』
伯父さんが机の上の紙包を、ドタリと疊へ投出した。春彌は其れを拾ふと、甚平爺さんの後を追駈けて行つた。——お父さんよりも亂暴で、お父さんよりもまだ慾がないや、と思ひながら……

▽薬と飴玉と鯖

『小野の春さん、鼻から提灯、ブラ／＼下げて、ワ－イ／＼小野の春さん』

近所の子供が春彌を見ると、皆で囃しだす。甚平爺さんの家の窓へ、藥代の紙包を投込んでき春彌、息を切つて鼻から提灯を出しながら歸つてきた。近所の子供にワイ／＼と囃されても、ニヤ／＼笑つて相手にならない。——己は天下を動かす人間になるんだ？ と、鼻の提灯を縮ませながら、伯父さん先生の家へ歸つて來ると、それから書物を包んで、安藝町の後藤塾へ通ふ。塾で精いつばいに勉強して歸つて來ると、

『春彌、往診に附いてこい！』

伯父さん先生の隨行を言ひつけられる。病人の家を覺えて、藥を届けてやる爲だ。その病人の家が、大概、貧乏な家ばかりだ。

『オイ、春彌、この家へ之を抛り込んでやれ。兼造の家だ』

『はい』

伯父さん先生が、汚い袂へ入れてきた藥を出す。それを春彌が兼造の家の縁へ置いて來ると、伯父さんは最う先へ悠々で行つてゐる。それを追駈けて走ると、

『や、臭い奴が來をツたぞ。春彌、横路へ廻れ』

『？』向ふを見ると、立派な装をしてる商人らしい男が、供の小僧を二人も連れて、伯父さんに遠くから會釋しながら歩いて來る。

伯父さん先生は、スツと横路へ曲つてしまつた。春彌は附いて歩きながら、後から訊ねた。

『伯父さん、今の人が臭いんですか？』

『うん、臭い？ 厭な奴だ』

『何が臭いんです？』

『金の臭がする。銅臭紛々たる輩だ』

『……』春彌は後で思つた。——伯父さんは垢の臭がする。

體臭紛々だ。

『オイ、春彌、菓子を買つてやらう』

横路の菓子屋の前へ、伯父さんが立止つた。飴玉を、うんと掴むと、一つを口へ投入して、一つを春彌にくれた。後は袂へバラ／＼と抛りこんでしまつた。伯父さんは何でも袂へ入れる癖がある。懐手をして歩くから、手に持つのは面倒らしい。悠然と飴玉を甜ぶつて行きながら、表通りへ出て來ると、

『やア、春彌、旨さうな鯖があるぞ』

伯父さんは魚屋の前へ立止つた。

『オイ、これを貰つて行くぞ、好い鯖だ』

タラ／＼と生血の滴れてる奴を二尾、取つてぶら提げると袂へ押込んで歩きだした。

魚屋はニコ／＼して見送つてゐる。伯父さんは、いつも斯うするらしい。春彌は呆れながら、伯父さんの袂を見ながら附いて行く。藥と飴玉と鯖が入つてゐるんだ。——この上、何が入るか解らない、と見ると、伯父さんの歩き方が、何だか變だ。跛を引いてゐる様に見える。片方の袂が重いからかしら？と、春彌は後で訝しく思つた。そのうちにグルツと町を廻つて、家へ歸つてきた。夏なので伯父さんも春彌も汗だらけに

なつた。

『オイ、春彌、この鯖を井戸端へ行つて、刺身に打切つてこい！』

伯父さんが片手を伸ばして、垢のついてゐる袖口を出した。春彌は仕方がないから、伯父さんの袂へ手を入れて、鯖を掴み出すと、

『飴玉はお前に遣る』

『はい』今度は飴玉を出すと、鯖の血だらけになつてゐる。おまけに伯父さんの袂裏が黒く附いてゐる。

『オイ、己にも一つ寄越せ！』

その飴玉を掴んで、パクリと口へ入れると、伯父さんは診察所の方へ行つてしまつた。病人が多勢、待つてゐるのだ。

▽強かの『イゴツソウ』

翌日も春彌は、後藤塾から歸つて來ると、伯父さんのお供を仰せつかつた。今日は町を通りすぎて、村へ出た。伊尾木村へ入つて行くと、傍の森に蟬が噪がしく鳴いてゐる。森の蔭に百姓家があつて、前に風呂桶が出してある。今しも程よく沸いてゐるらしい。蓋まで取つてある。が、誰もゐないのだ。と見ると、

『うん、春彌、己は風呂へ入る。こゝで待つとれ』

伯父さんが早速に、着物を脱ぎだした。帯も一緒に持たされて、春彌が傍に立つてると、真裸になつた伯父さん、禪を取つてスタ／＼と風呂桶の前へ歩きだした。手拭は禪だ。いきなり桶へ入れて搔廻すと、

『あゝ、好い湯だぞ、春彌、お前も後で入れ』と、頭をツルツル洗ひだした。伯父さんは醫者だから、髪を剃つてゐる。大入道だ。

『やア、どツこいしよ』と、跨いで桶の中へ入つた、瞬間に、

『あッ』と、春彌は立竦んだ、

——初めて見た。伯父さんは大罽丸なんだ！ 凄く大い。

だから、變な歩き方をしてたんだ、と、春彌が驚いて見ると、伯父さんは禪で悠々と體を洗つてゐる。餘ほど好い氣持らしい。森の上を仰むいて、湯に漬つてゐる。ヌツと立上つた。

見事なものだ。真裸の大入道が大罽丸を下げて兩手を高く上げると、とても大きな欠伸をし初めた。そこへ家の横から、これもまた真裸のお嬢さんが、手拭を下げてヨチ／＼と出てきた。途端に、風呂桶の中から兩手を上げて欠伸してゐる大罽丸の大坊主を見るや否や、

『キヤーツ、……』いきなり臀持を突くと、そのまゝ氣を失

つて後へ倒れた。

それを見た伯父さん、慌てゝ風呂桶を飛出した。

『春彌々々ツ？ 袂の藥を持つてこい、早く！』

と、お嬢さんの脈を取りながら、伯父さんが坊主頭を振つてゐる。そこへ家の人がお嬢さんの叫聲を聞いて、裏口から一散に走つてきた、と、これも眼の前の光景に叫びだした。

『た、大變だツ、誰か來てくれエ！』

忽ち村ぢうの騒ぎになつた。が、安藝町の小野順吉先生と知れて、皆が初めて安心し、お嬢さんも先生の介抱で息を吹きかへした。今日の往診は是れきりで、ブーツとなつた春彌は、伯父さんの後から夢中で歸つてきた。

すると、家の前に、今まで見たことも無いほど立派な朱塗の駕籠が二挺、ピタリと横着けになつてゐる。伯父さんは忌々しげに呟いた。

『なんだ？ 臭い奴が來をツたぞ、煩いな』

ところが、これは臭い奴でなくて、高地のお殿様が、特に小野順吉をお召になるといふ、丁寧なお使なのだつた。

『御前の思召に依つて、先生の御診察を特にお望みにつき、早速、御來駕を頂きたく、お迎へに參上いたした次第でございます』



特使の武士が、慇懃に口上を述べた。さすがの伯父さんも平伏した。が、右の方の膝を立てゝる。座れないのだ。股の間に凄惨な邪魔物が膨れてゐるから、いつも座つたことがない。この時も片方の膝を立てたまゝで、『畏まりました。直にお伺ひ致しませう』と、平伏して答へた。が、立膝は少しも畏まつてゐない。

武士はそれを見て、妙な顔をしなから、『さらば何卒、お仕度を』と、重ねて言ふと、『いや、仕度はござらぬ。これより参上仕つる』と、着換へた所が同じ様な垢臭い着物しかない伯父さんだ。平然として

『この他に仕度せよとの仰せならば、平に御免被るでござる』と、旋毛を曲げてしまつた。

土佐では旋毛曲りの人間を、『イゴツソウ』といふ。イゴツソウの小野順吉先生、着のみ着のまゝで高知の城の大奥へ運ばれて行つた。伊尾木村で裸のお嬢さんを氣絶させてきた、その時の禪を濡れたまゝで締めてゐる。

藩主の山内容堂公は、風心地で寝てゐられた。御典醫は數多く仕へてゐるが、——民間に名醫あり、其名を小野順吉といふ、兼てお氣に入りだつた小野篤治の兄に當る、と、聞かれて茲に召出された、その順吉、見るからに汚い體裁で、御前へ近づいてきた。家老達を初め、並居る御典醫連、これを見て盡く苦りきつた。

『あゝ其方が、小野順吉かの？』氣輕な容堂公、親しく聲をかけられた。

『左様にござります』と、順吉、平伏したが立膝のまゝだ。

『少し風氣味での。診斷を



頼みたい。近う寄れ、苦し
うない』

『ハ、ツ、お脈を拜見いた
します』

枕許へ進むと、やはり立
膝のまゝで殿のお手を取り
かけた。それを眺めてる家
老の後藤象次郎が、横から
一喝した。

『無禮であらう、小野順吉
座れッ！』

『ハ、ア』と、順吉、殿の
御手を離すと、『立膝は拙者
の立前、これにて御免を被
ります』悠々と後へ退りだ
した。すると、

『いや待て、予が差許す、
診断を頼むぞ』

名君の容堂公、敢て咎め
ずに順吉を親しく引立てた

順吉は快く感激して、再び前へ近寄ると、立膝のまゝで隈なく拜診を遂げた。

『どうかの？ 予の容態は？』 殿が訊かれる。

『ハツ、これしきのお風には、御典醫にて、お間に合ひませう。御免を頂きます』

小野順吉、サツサと御前を下つて行く。その後姿をジーツと見送つた家老の後藤象次郎、思はず微笑した、——強かのイゴツソウ、見所がある！ と。

▽合奏と義太夫に送られて

後藤象次郎と小野順吉、後に肝膽相照す仲になつた。順吉はそこで親戚の岩崎彌太郎を、象次郎に紹介し、彌太郎出世の動機を助けた。春彌は後藤塾を卒業して、高知に在る致道館へ入學した。藩で立てた學校である。——天下を動かす人間になりたい！ いつまでも『小野の春さん、鼻から提灯』では、偉い者になれないと、改めて志を立てると、日本では豊臣秀吉と徳川家康、これが先づ偉いと、自分の姓を『豊川』とつけた。次に支那で偉いのは、張良と陳平だと、自分の名を『良平』と改めた。——豊川良平？ 和漢の英傑を一身に備へた決心で意氣軒昂、致道館の寄宿舎で大いに苦學し

てゐると、安藝町の伯父さんが危篤との使がきた。春彌の良平、愕然として直ぐに安藝町へ、十一里の路を駆付けてきた。

ところが、家へ入つてみると、非常な騒ぎである。混雜してるよりも、鳴物の賑しさに、春彌の良平は、度膽を抜かれながら、座敷へ急いで行つた。親類友人、ゴチャ／＼と集まつてる。或者は三味線を擁へて絃を合してる。傍に月琴を弾いてる者がある。琴を前に置いて爪を穿めてる者、尺八の歌口を濕してる者、今から合奏が初まるらしい、その真中に伯父さんが仰むけに寝て、何だか嬉しうに見える。枕許に座つてる船本傳平といふ人が、これは伯父さんの親友で。

『おゝ、春彌さんが歸つて見えたぞな』と、俯いて知らせると、

『うん、さうか、春彌、こゝへ来い？』

伯父さんが悦ばしい眼色で招いた。その枕許へ寄添つて春彌が座ると、

『今死ぬ所だ。泣くなよ、これから賑かに送られて行くからな、さア皆、用意ができたなら初めたり！』

危篤の伯父さんの言附で、皆が合奏を初めた。三味線……尺八……琴……二絃琴……月琴……明笛まで入つてる。賑かなものだ。伯父さんは眼を瞑ちて、愉快さうに聞いている。

さんさめく合奏が、そのうちに終つた。ゆつくりと眼を開けた伯父さんが、微かに言ひだした。

『面白い。なか／＼旨い。傳平さん、今度はお前さんに頼む、自慢の「阿古屋の琴責」を一段、例の調子で語つてくれ』

臨終の頼みである。斷りかねた船本傳平は、キチンと座り直した。部屋ぢうが寂と静まつた。

語りだした『阿古屋の琴責』——伯父さんは眼を瞑つて聞いてゐる、いかにも心地好さうに、恍惚と聞き入つてゐる……

『水責火責はいとはねど、義理と情に絆されては、……』と今しも佳境に入つた時、

『うん』と、伯父さんが頷いた。

傳平は涙を泳へながら、語りつゞけた。伯父さんは、あくまでも心地好げに聞いている。やがて一段を語り終つたとき、伯父さんは微笑したまゝ亡くなつてゐた。慶應元年の正月二十日、六十一歳だつた。

伯父さんは生涯、獨身だつた。子の有りやうがない。そこで春彌の豊川良平が、その家を相續した。後に三菱の大黒柱に出世し、明治大正の財界を縦横に切つて廻した豊川良平氏の淡白で豪快な性格にはこの小野順吉伯父さんの血と感化が

少年時代から多分に浸入つてゐたのであらう。(をはり)

大枚支拂つたが

『僕はこの半年の間に女達のために一萬圓も注ぎこんぢやつた。』

『お楽しみが数々あつたつてわけだね。』

『どういたしまして。そのかねはみんな家内と義母のために支拂たのでね。』

樂あれば苦あり

『嫁——今度の女中はほんとによく働くから給料を増さうと思ふの。』

『母——ちや、もう女中の心配もなくなつたと云ふものだね。』

『嫁——でも、うちの人のことが心配でね。』

外の用途

美しい娘(藥局で)——何

かい、養毛劑あつて?

主人——ございます。……然

しお嬢さんのお髪は大へんお綺麗にお見うけいたしますが。

美しい娘——モチよ。あた

しの頭につけるんぢやなくつてよ。でもあ。だしの外套の毛

並みを見てよ。ほら、こんなにバサバサになつちまつてゐるの

でしよ……

不幸な轉向

「あなたは彼氏と結婚なさる前は何をしてお出ででした?」

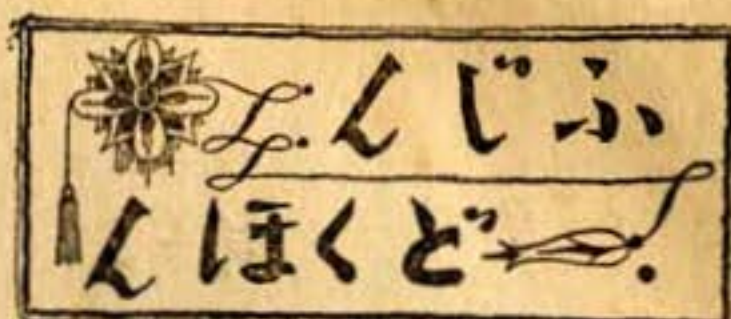
『女中奉公』

『すると御幸福な轉向をなすつたわけですか』

『ところがちつとも、——なぜ

つて私、たゞで働かなければ

ならない現在ですもの』



洗練された美とは？

— 内のお化粧、外のお化粧 —

三越容粧室主任

いりけり子

人形でないやうに

お化粧は婦人の身窟と申しまして、雖方でも相當に苦心と注意を拂つて研究されて居られます。そのお化粧の方法も、最近では非常に進歩して大分複雑になり、また皆さんも、目立つて御上達になりましたが、まだ、はつきりした、自分の特徴を生かしてゐらつしやる方が少いやうに思ひます。

この頃、立體的の化粧と云ふことが、いかまいく言はれて居ります。それは平面的でなくて深みのある化粧、つまりいろ／＼な色彩

をもちひまして顔に陰影をつくり、その人の人の容貌を生かすのであります。この方法には上手にやれば相當に効果があつて、ステージなどにお立ちになる場合など、非常に引立つて見えるものであります。しかし、人と對面なさるやうな場合には、私どもがそれこそ一生懸命に苦心しておつくりして上げたお化粧が、さほど目立たないやうなことがございます。それはその方の身につけてゐらつしやる装ひを身體から引き離してしまつて、お化粧なしの、人格がそのまゝ相手の前に浮き出して来るからであります。

私ども美粧に従事する者としてしましては、その人／＼の個性美を生かしてあげるやうに随分苦心するのでありますが、さて、それ以上その方の人格のお化粧までしてあげることは到底出来ないものであります。つまり、外面の化粧術には十分の自信をもつてゐましても、その一線を越えて、その方の内面——精神的なお化粧は、私どもの仕事以外でありまして、それは皆さまお一人／＼の責任であります。

人形のやうにももの言はず、表情の動きもなく、じつとしてゐるものをつくることは、わけのないことでそれこそ絶對的の自信があります。でも、それは結局人形であつて、人間ではないのです。

どんなに上手な美容術師でもさうですが、ほんたうに人間のお化粧が出来る人はないと思ひます。それはお客さまの心のお化粧までしてあげることが出来ないからであります。心のお化粧はやはりご自分でおやり

にならなければなりません。

垢抜けのしたお化粧

ですから、いくらお化粧を美しくし、立派なお召物を召していらつしても、その方の中から出てくる美しさがなかつたら決して美人とは云へないと思ひます。人格の美しい方はその容貌までが引立つて見えるものです。

随分失禮な申し分ですが、近頃の方は昔の方に較べてずつと亂暴になつてをられます。女ながらも惚れ／＼するやうな方をお見受けすることが少くなりました。それは目鼻立だけの美しさを言つてゐるのではありません。洗練された心の持ち主であれば、それが自づとその表情にあらはれて出るものであります。

顔やお召物、つまり外のお化粧よりも、洗練された心の持ち主となること、即ち内のお化粧が非常に大切です。

どんなお召物が自分に一番よく似合ふとか、どんなお化粧が自分を最も美しく見せるかと云ふことは皆さまも相當ご苦心なさつてゐらつしやることでせうが、かうした内側のお化粧については随分無鐵砲な方が多いやうに思ひます。

それかと云つて心の内だけきれいなら、外のお化粧はどうでもよいかと申しますと、それも亦いけません。

いくら家が立派で、家具などの良いものが置かれてありましても、お掃除が行き届いてゐなかつたり、埃が白く見えるほどつもつてゐたのでは決して美しいお家とは申されません。

やはり、個性美を尊重した外のお化粧と、その人の心から出る優しい美しさ、つまり内のお化粧ですが、この二つが立派に出来上つてゐるものこそ、眞に垢抜けしたお化粧だと考へます。この内外兩方面のお化粧に御注意なさつていただくことが、本當にその人を美しくする要諦だと存じます。

潤ほひのある美しさ

尤も一般に婦人は迷信にまで入り易い傾向がないとは申せません。一寸したことを大變氣にかけたり、何でもないことをくよくよししたりするものです。さうした心の痛みはすぐにお顔の表情となつて現はれます。そしてそれは女性の美を害ふ大きな原因とも云へます。

お人形のやうに形だけ美しく出来あがつても、それでは物足りないことだと思ひます。

殊にこれから伸びやうとしてゐらつしやるお若い方は、あなたのその美しさを、より一層深みのある美しさにするために、外のお化粧も勿論必要ですが、その上更に内のお化粧——宗教による精神的教養——をお忘れにならないやうに呉々も希望してやみません。

談 相 仰 信

唯、命終るを待つのみか？

(問) 人は死す。信心を得たる人は淨土に參ると云ふ。淨土は汚れと苦しみとは比較にならぬ美しき所謂極樂なりと云ふ。信心を得たる人は此處にて永劫に樂しく暮すと云ふ。現世は假にてこの淨土こそ眞の安住地なりと云ふ。然らば現世に於る一切の名誉、一切の富貴、否命すらも、一念發起して信心を得る時は大氣中の微塵と等しく、往生の前には何の要も覺えず、唯々命終らん時を待つのみにて、格別の勉強努力、所謂大成大功するの要無きものと存するが如何に候や。拙者未だ弱冠にして念佛門に入りたれど、稱名念佛により往生せんこと疑もなければ、斯の如く穢土にて營々と罪の生活を營む必要はなく、随つて一家をなすことも、勉強大成せんことも要無く唯稱名して命盡きむ時を待たば可と存候。然るに世の倫理は奮勵努力大成し以て國家社會に盡すあらんことを奨む。之果して斯くすべきものなり

や。佛教に於ても然りや。然りとせば何故穢土の些々たる修業を積むべきや、拙者の如くんば所謂醉生夢死に墮せざるか。愚昧なる青門徒の爲め、進むべき道御教示賜り度伏して願上候。

(東京深川 池田政治)

(答) 何誰でも一應は起る疑問ですが、念佛の信仰は決して箇人的な功利的なエゴイズムではありません。自分と云ふものが他と一切關係のない箇在的なものなら、一日も早く極樂に往生すべく此の世を「さよなら」した方がよいかも知れませんが、自分を本當によくするのが目的であり、そして其自分が、全くの孤立でなく社會に關係し國家に關係し、廣くは天地に關係して居るのですから、如何にもしても、自分の周圍をよくしなければ、本當によくはなれないと云ふ事が、痛切に感ぜられて來ます。これが信仰生活の事實です。だから出来る丈周圍を清めて行きたい希望が起り、色々な正しい行動も起る譯であります。

また淨土への願望は、初めは箇人的な氣持から、出發しましたが、その往生の目的は他の人をもよりよき人とならしめたいと云ふ願ひへ、轉心しますから、謂ゆる大乘的な還相回向心に更生しますから、出来る丈、此の與へられた生命を本當に生かすやうに努力する事にもなり、延いてはそれが國家社會に盡す行爲ともなるのです。もし私達が極樂に行つて晝寢でもして樂をしたいと云ふのなら、それは外道であり、邪望であつて、佛も「彼國の受樂無間なるを聞いて往生を望むなら、それは決して眞の淨土に往く事は出来ない」と戒しめられて居ります。かの蓮の花も沼田の中に根をおろして、然も楚々たる清らかさを以て咲き出でるから、一層美しさを感じるのですが、それと同様に此の苦惱の多い邪惡の満ちて居る世を土臺にして、清き信仰心に生き、他の多くの人々をも共に清からしめんとするので、念佛の信者のことを御經にも「人中之芬陀利華」とも云つて居ります。また臨終最後の正念を許して居るのは最少限度を示めたもので、最後の一念さへよければ往生が出来ると思つて、野方途に放逸三昧でやると云ふならば、そんな横着坊

信 仰 相 談

主を何うしてよき人にして呉れませう。極樂は「諸上善人供會一處」のところだと御經にも云つてゐるやうに、上善人の居る處で横着な人達の居る處ではありませぬ。まして信仰は心から反省して、如來の大慈悲にすがつてよりよき人にならんと改心することなのです。最少限度、命の終る時でも許される譯です。法然上人も「五逆十惡の者でも念佛に依て更生することが出来る。然し一度信仰に入つた限り、小罪をも犯すまいと心掛く可きである」と云つて居られます。然し凡夫の身の悲しさで犯すまいと思つて居ても、ツイ犯し勝てずから、ますます如來の大慈悲にすがる氣にもなるのです。それを格別勉強せずともよい努力せんでもよいなどと思ふ根性ならば、何處に一念發起がありませうか。それは決して正しい信仰ではありません。之をよく辨へて下さい。そして正しい信仰に進んで下さい。誤りは誰でもあるものです。要は誠を以て進んで下さい。(中村辨康)

淨めと穢れとは

(問) 『小消息』の文の中に、「生まれがた

き淨土に往生せんことよろこびのなかのよろこびなり。」と御座ります。我々在家の者は物故せる人がある場合には、貴賤の別なく、一ヶ年又は百ヶ日の間、謹慎遠慮とか申して祝祭日を過ぎします。これは故人に對する哀悼の意でせうが、私も近親舊知に逝かれ悲しい思ひをしてゐる一人で御座ります。

俗風にては「穢れ」云々と申して忌日を終へたら「淨め」とか申すものをする習慣があります。これを佛教の方ではどうしたらよろしいでせうか。御教示を願ひます。(西京 清水辰次郎)

(答) 御尋ねの要點は「忌服」の習慣を何う考へたらよいかと云ふ事にあるかと存じます。

我國上古に於ては一度死者を出だせば、其家を捨て、他に移り住んだ習慣があつたさうですが、之は宗教的な意味の外に、衛生的な意味も多分に含まれて居たものかと思ひます。肉體が腐れて行くことは穢れとして忌み嫌はれたに相違ありません。

また「血」に對する信仰が、禁忌の觀念

をも導き、「血」を取扱ふものを特視するやうにもなりましたので、血族の近いものは忌服して、謹慎する習慣も作られたのでした。

佛教では生死其ものには別段忌み嫌ひは致しません。唯だ其人が迷ひの生活をして居たか、或は目覺めの生活をして居たかで淨穢がきまるのですから、それに佛教の荼毘式は土葬よりも寧ろ火葬にあつたのですから、死人に對しての忌みとか穢れとかは問題にならなかつた筈です。

けれども我國に於て、現に七々日とか百ヶ日とか一周忌とか云つて忌日を弔ふのは古來からの習慣と、佛教的な追善追善の誠を盡す孝養とが結びついたもので「忌日」の忌と云ふ文字には深い意味がある譯ではありません。

「穢れ」とは精神的な惡を云つたものですから、本當に心から反省すれば、それが直に「淨め」であります。但し、形式丈でも「淨め」を行へば、幾分か心も淨まるので形式だからと云つて一概に廢することもよくないと思ひます。(中村辨康)

信仰の歷程

一枚起請文講義(五)

中 村 辨 康

飛躍を要す

(チ) 信仰への飛躍

物には順序がある。然し、信仰は普通常識の順序を経ず、飛躍に依て獲得するのであるから、飛躍に導く迄の順序と、飛躍してから後の順序との其中間の事情をハツキリ表現することは出来ない。

だから飛躍に到る迄の順序を物語れば、大體よい譯である。

所が多くの人には其飛躍の處を明かにしてから、信仰に入らうとして居るらしい。

それは恰度喰べても見ない果物の味を、ハツキリ分からせて貰らつてからでなくては、其果物を喰べる氣にならないと云ふ神經衰弱的潔癖家と均しいものである。

「おいしいものだ」と云ふ事さへ分つたらよささうなものだが、それを根堀り葉堀り聞きたがつて居るのだから困つたものである。

頭で知るよりも實際に味つた方が早い。

だから、法然上人は「但し」と斷つて

飛躍への順序

- (一) 上は佛を求め、
下は一切の人々
を濟度せんとす
る心
(二) 菩提心の
こと
(三) 小乗教の比丘
が嚴守する律法

「三心四修と申すことの候は皆な決定して南無阿彌陀佛にて往生するぞと思ふ内に籠り候なり」

と、直裁簡明に云ひ切つて居られるのである。

即ち南無阿彌陀佛と申す事丈でよいのだと云ふ「決定の信」こそ大切で、三心も四修も皆な此信仰の中におのづから含まれて居ると云ふ意味である。

然らば、何うすれば飛躍が出来るか、何うすれば信仰に入り得るかと云ふ事を問題にしやう。

それは何と云つても「求道心」がなくては駄目である。そして夫れに伴ふ「實行」がなくては駄目である。「求道心」と云つても「菩提心」と云ふやうな高級な「道心」でなくとも差支へない。唯だ信仰に入りたいと思ふ心丈で充分である。

また實行と云つても(三)二百五十戒を嚴守したり、坐禪觀法をしたりしなくともよい。唯だ念佛する丈で結構である。

唯だその念佛と云ふものが、入信以前の念佛は、ホンの形丈で本當の念佛になつて居ないが、念佛することに依て、段々至誠の心が養はれ、從て自分を反省する氣持が強く深くなるから、其處に必然的に信仰への飛躍が起つて來るのである。是には理窟も何もありません、唯だ宗教心の動く事實なのである。

然し、念佛して居さへすれば、ノホホンに構へて居てよいと云ふのではない。其處

名と姿と離れず

至誠心と發願心

には何うしても信仰を求める心が働かなくてはいけない。求める心が強く働けば働くほど、念佛が段々自分を信仰へと導いて呉れるのである。

一體、物の名と云ふものは、それを言葉に現はす時、其姿と用途とが想像されるものである。それを佛教では「名體不離」と云つて居る。例へば「茶碗」と云へば直ぐ茶碗の形と用途とが浮んで来るそれと同じ様に「阿彌陀佛」と云へば、阿彌陀佛が思はれて來なくてはならぬ筈である。そして阿彌陀佛の無量壽であり、無量光であり、大慈悲であることなども臆氣乍らにも思ひ浮べられて來なければならぬ筈である。處が茶碗などの場合は造作もないのに「阿彌陀佛」になると、何うしたものかハツキリ浮んで來ない。

また口には「南無」と云つて居ても、歸命する氣持が不鮮明で、自分の本心を満足させる程の感じが起つて來ない。

それは畢竟何うした理由に依るのであらうか。

まだまだ道を求める至誠が足りないからではなからうか。

まだまだ阿彌陀佛を求める願心が足りないからではなからうか。

私達のもつともつと反省すべきである。自分を深く堀下げて、もつともつと慢ぶつて居る氣持や、自分の力を頼む氣持を反省すべきである。

くどいやうだが自分に對する深い反省がなくては信仰に入れるものではない。それ

宗教的反省が要件

(四) 唯だ自然現象
を縁として大悟
すること

は木に依つて魚を求め、水の中に火を探すに均しい。

深い反省がある程、大きい飛躍がある。信仰への飛躍の大小は、反省の深さの強弱に依る。だが、特別の大事件にぶつつからない限り、通常では反省が深く起らない。それは反省することは元來苦しいものだから、大概の處で棒を折つて中途でよして仕舞ふからである。然し、念佛して居ると反省は深くなる。そして單なる道德的な反省でなく、宗教的な反省へと導かれて来る。

反省其ものは元來道德的なものだが、道德的な反省は、現實的な大きい失敗をしないう限り、さう深く強くは起らないが、宗教的な反省は、一切の社會惡や團體惡迄も、我身一つに全責任を感じ、自分にはハッキリした罪造りの意識はないけれども、現に自分が救はれて居ない事實を基礎として思ひを深くする時、過去の世、久遠の昔しか、色々の人に迷惑をかけ、色々な事件に罪惡を重ねて來たかも知れぬと、如來の前にひれ伏し懺悔の涙を流す氣にもなるのである。

若し自分の素質が本當によいものならば、今頃まごまご迷つて居る筈はない。誰に教へられなくとも、謂ゆる「無師獨覺」して大悟し徹底して居るかも知れないのである。それを下らなく毎日毎日醒醒して居るこの現實を顧みたら、其處には一點の自惚れも許さるべきものではない。

法然上人は求道時代に

(五) 貪欲、瞋意、愚痴等が心を悩ます原因となるから之を煩惱と云ふ

(六) 月を覆ふ雲も罪障——現在の罪業障——過去の罪業障——本質的な悪

入信と深心

「自分は戒法は一つも守らず、心は亂れ勝で禪めることも出来ないから、悟りの智恵を何に依つて起し得るであらうか、自分に取つて其方法は何も有り得ない。随て常に起り来る煩惱を斷ち截することも出来ず、生き死にの世界から脱け切ること出来ない。自分は一體何うすればよいのであらうか、丸で暗中模索の遣る瀬無さである。」

と云はれて心をもみ身を責めて愁しまれたと云ふ事であるが、求道心は極めて熾烈で觸れば火が出るやうに燃え盛つて居りながら、自分の助かるべき道が少しも發見されなかつたのだから、何んなに悲しまれた事であらう。何んなに苦しまれた事であらう。屹度、想像も及ばないものがあつたと思はれる。

然るに私達はもう既に道は與へられて居るのである。念佛して居ることそれ自體が既に救はれて居る姿なのに、それがハッキリ意識の上に感じられて來ないのである。つまり信眼が開かないから、それが分らないのであらう。(六) 三障の雲に覆はれて、如來の光りを仰ぐことが出来ないのである。

然るに反省し懺悔すれば必ず其雲は破れる。一人も例外もなしに熱烈な「願心」と純眞な「至誠心」とで信仰への「深い心」が養はれ、三障の雲を突き破つてしまふのである。

この信仰的の「深い心」が養はれたら、屹度、佛への飛躍はある。屹度ある。例外

は決してない。

それは信仰人の皆な均しく経験するところである。

(リ) 三心と云ふもの

以上の事は信仰への飛躍に導く「三心」の働きを簡単に云つたのであるが、「三心」はまた信後に於ても信仰を培養して呉れるものである。

「三心」と云ふものは信仰上の心もちとして教義の上ではやかましく云はれて居るが、信仰事實としては別段むづかしいことがらではない。

一口に云へば「本心から（至誠心）阿彌陀佛の浄土を求めて（回向發願心）南無阿彌陀佛と如來の名を呼べば救はれる（深心）」と云ふ信仰心なのである。

至誠心とは

回向發願心とは

またこの「三心」のうち「至誠心」には自分を本物にしようとする氣持（自利眞實）と、周囲をも本物にしようとする氣持（利他眞實）とあるが、之とても自然に起る心で別段むづかしいものでなく、「回向發願心」と云ふのにも、自分が救はれたい（往相回向）と思ふ心と、他の多くの人々も共に同じ喜びを味はつて行くやう（還相回向）に、念願する氣持とを分けて居るが、之れまた極めて自然の心持でむづかしいものではない。

深心の二要素

然し考へて見れば誠に大きな心で、信仰に入らざる限り、かうした氣持は経験の出来るものではない。だからますます「深心」の中の「信機」と云ふ自分を反省する心

三心とは念佛の内
容

と、其反省することに依て如來への心（信法）が、深められて行くのでもある。かくの如く「三心」と云ふものは信仰の内容を一應分解したものに過ぎなく、念佛の信仰を持つ限り、誰でも自然に意識する経験事實であるから、徒らな安心（三心）沙汰などは要らないのである。安心沙汰ばかりして念佛を忘れて居るやうでは何にもならないからである。

現代人は昔の人よりも氣が短くなつて居るから、三心沙汰と云ふやうな弊害に陥ることも少ないとは思ふが、法然上人時代には佛教理論が盛んであつたから、かなりかうした事を議論したものと見えて「學生、骨になつて念佛や失はんずらん」とか、また此一枚起請文の「三心も四修も念佛の中に籠つて居る」と云はれて詮索倒れにならないやう誠められたのでは無いかと思はれる。

（又）信仰の修養法

また信仰を求め、信仰を増進させる爲とあつて、あつちに行き、こつちに行き、丸で宗教ルンペン見たやうに、方々聞き歩いて、結局何の得るところもなく、不徹底な概念を雜然と陳列させて、一通りの宗教通を以て満足しやうとする悪い癖に墮ちる者もある。是などは馬鹿の骨頂で、無駄な骨折に過ぎない。

早い話が「一藝に達すれば萬能に通ずる」と云ふ言葉もあるやうに、謠曲などで、小鼓なら小鼓に専心して徹底する迄、倦かずにやり遂げれば、笛も太鼓も大鼓も

無餘修と云ふこと

宗教ルンペン

無間修と云ふこと

謠も仕舞も本式に習はずして自然に分つて来るし、和樂も洋樂も一通りは素人以上の觀賞が出来るやうになるものである。かくの如く何か一つを貫けば、それに關連した事とか、それに類似する事とかは自然に會得が出来るのであるから、折角やりかけたらトコトン迄やり遂げなければ駄である。

信仰も亦た其通りで……

即ち「四修」の中の「無餘修」と云ふことは、迂路迂路せず一路邁進せよと云ふことを教へたものである。

また遣りかけたら倦きずにやる必要があらう。刀を鍛へるのに、鐵が眞赤に焼けて居る間にトンカントンカン大槌小槌で透間もなく打込んで行かねば利刀にはならぬ。向ふ槌と氣合が合はなかつたり、氣合の腰が抜けたりしたのでは満足でなく、況して打つては休み、休んでは打つと云ふやうな事では畢竟鈍刀以下である。

信仰も念佛する時、若し倦きが來たら、其倦きが無くなる迄辛棒することが必要である。

倦怠を乗り越えて進むこそ本物になる基である。

倦怠を乗り越せば必ず熱が出て来るにきまつて居る。

熱が出て來たら其機會を逃がしてはいけない。千載一遇の機會である。一向專念をなすべき好期である。此時屹度何かの信仰體驗を経験するであらう。

恭敬修と云ふこと

だから間を置かずにやり遂げることが大切である。

かう云つたとして強引でやれと云ふ意味ではない。素直に落着いて悠々せまらず、ジツクリ辛棒強くやることである。

恰度米を搗くのに、無茶苦茶にやつたのでは米がくだけで、ものにならないと同様に、却て信仰を粉微塵にしないにも限らない。

「南無阿彌陀佛」と聲に出たのを、自分の耳に聽いて、其聲に含む精神内容を吟味しつつ、一聲一聲を精練して行くのがよい。玄米の一粒一粒が段々に精白されて行くやうに、念佛を通して如來への心を純粹に純粹にと練つて行くのである。

無論自分の力では出来ない事である。だからこそ如來へ南無の心を運ぶのである。

「南無」の精白法。

變な言葉の使ひ方であるが、それが四修の中の「無間修」のコツである。即ち念佛のコツである。

次に信仰上必要缺くべからざるものは「敬ふ」心である。敬ひがなければ傲慢になる。傲慢になつたら人間はおしまひである。

「四修」の第一に「恭敬修」が置かれて居るのも、所以あることと思ふ。

恭敬がなければ反省もない。恭敬がなければ信仰も起らない。

だから何うしても恭敬が必須的なのである。

長時修と云ふこと

念佛する事以外
何もなし

(七) すべて念佛の一
行に歸結する
と云ふこと

法華經にある常不輕菩薩は一切の人を恭敬し拜んだと云ふことであるが、それ程でなくとも、佛の前に額づき、佛の前に禮拜すること、それ自體既に念佛の姿である。即ち口で稱へる念佛を身體で現はしたものである。

かくて此の三修（恭敬修、無餘修、無間修）を、一時的でなく一生貫き通して行くのが、第四の「長時修」で、信仰の培養、信仰の増上が、此長時修を通して

恭敬長時修

無餘長時修

無間長時修

信仰生活の三要件

が具備せられて、達成せられるのである。

然し之も唯だ其箇條が説明せられる丈では何にもならない。要は念佛することにある。「念佛すれば救はれる」と信じて「南無阿彌陀佛」を唱へる心持と動作の上に、三心も四修も自然に含まれて居るのだから、特別に強く意識して斯くあるべきであると云ふのではない。念佛の中に「一切籠り候なり」である。

だから「結歸一行三昧とも云つて居る。

かくの如く法然上人の信仰は、一にも念佛、二にも念佛で、此外には何も無い。

平生の生活を念佛で統一すること、此事以外に純粹な生活原理はないと見たのが法

然上人の信仰である。

(第五回終り)

編輯後記

梅雨が逆戻りしたやうな天氣が、數日續いて萬事番狂はせ。人間共は皆んな憂鬱な顔をしてゐる。自然の我儘にはとても太刀打ちは出来ない。

が、「淨土」の編輯室は天氣にかまつてなんぞゐられぬから、雨が降らうが、槍が降らうが、憂鬱をけとばしての大活躍。「矢張り夏は暑いよ」と大汗を流してゐる。

○ 岩井大僧正猥下の法話を得て、本誌の光彩いよく陸離。深淵なる教理をあれほど平易に説かれたは矢張り當代隨一。

○ 宇野浩二氏が今月から小説『旅路の芭蕉』を連載して下さるのも本誌の自慢。現文壇の大家が苦心

考證に成る名文章、興味本位の讀物とは違つたしみじみとした味。文藝作品としても近來の大收獲となるもの。讀者よ期待せよ。

○ 『激刺たる朝』を如何にして得ることが出来るか。活動の秋を迎へて、諸名家の心構へを伺ふのも、少なからぬ意義あるもの。と編輯子は信じてゐる。

○ 大江精志郎氏は人も知る哲學界の精銳、哲學を以つて饒めた宗教は自他ともに啓發されたものが多い。

○ 佐藤春夫、宇野浩二、山中峯太郎、北林透馬の四氏の小説は現文壇の各方面を代表するものであつて、それぞれ本誌ならでは得られぬ味。

○ 最後にお断りしなければなら

ぬのは、毎月掲載を續けて來た眞野正順氏の講話、本月は御多忙の上に愛嬌の御病氣などあつて、如何としてもメ切に間に合はず、來月にゆづりました。讀者には申譯ないが、來月まで、僅かですからお待ち下さい。

○ 明朗な秋、活躍の秋、そして「淨土」の肥ゆべき秋。天よ更に高くあれ、「淨土」と共に。

法然上人鑽仰會とは

日本文化の母胎は法然上人の思想と人格である。法然上人を知らずして、日本精神を語ることはできない。日本を語らんとするものは吾等と協同せよ、お申込み次第趣意書を無代進呈。購讀規定御參照下さい。

淨土 九月號

昭和十年五月二十日
第三種郵便物認可

昭和十年八月十日印刷納本
昭和十年九月一日發行

(定價金十錢)

品川區南品川四丁目三七八
編輯兼 佐藤 賢順

東京市本所區千歲町二ノ一八
印刷人 赤尾 光雄

東京市牛込區市ヶ谷加賀町一ノ三
印刷所 大日本印刷株式會社

發行所 法然上人鑽仰會

東京市芝區芝公園四丁目四番
振替東京八二一八七番

「淨土」購讀規定

一部 定價 金十錢

(送料一錢)

一ヶ年 金一圓

(送料不要)

右の一ヶ年金壹圓は法然上人鑽仰會の會費です。入會申込みと同時に一圓御納めになれば、「淨土」及び月刊新聞「法然鑽仰」が一ヶ年間購讀できます。その他種々な特典が得られます。

大正大學教授 大野 法道著

法然上人

不拔なる信仰への道！それは巨人法然上人が説き且つ行つた道である。そしてこの道こそ現代日本を率いて立つべき日本精神へと通じてゐるのだ！！

法然上人に關する文獻は古來少しとしなかつたが、いづれも難解に過ぎるか、浩瀚に失するかして、萬人に適する文字を得なかつた恨みがある。篤學の著者が研磨してもものしたるこの簡潔にして要を得たる一本は讀者をして直接上人に接するの思ひあらしめ、その嫻々たる餘韻は讀む者を法悦の彼方にひき込まずにはおかない。

再版出來！！ 施本、贈答用
として、最適當なもの！

發行所 法然上人鑽仰會

東京市芝區芝公園明照會館内
電話芝(43)一三五二・八四〇
振替東京八二一八七番

定價拾五錢

(送料二錢)

四六判七十頁

總ふり假名付

美麗なる繪畫表付

昭和十年五月廿日第三種郵便物認可(毎月一回一日發行)
 昭和十年八月廿日印刷部本
 昭和十年九月一日發行

淨土第二卷第五號、定價金十錢(送料一錢)

「忘れもの」

「え、え、帽子、ステッキ、靴、襪口……」

「こんな大事な忘れもの」

「あッ、それを忘れちゃ生命線の一大事だ!」

父はオフィスで……

一粒肝油ハリバノ!



「どうだい、ベツに嘔氣は起らないだらう」

「え、ほんご。……樂々とおさまりましたわ」

「ハリバで、安産をして、元氣な坊やを生むんだね」

母は安産の護りに……

一粒肝油ハリバノ!



「けふ學校で目方を量つたの、一貫五百日もふえてゐたよ」

「そりやよかつた、やつぱりハリバのお蔭だね」

子供たちの強化に……

一粒肝油ハリバノ!



北洋深底に棲む「鰵魚」から採つた劇期的の新肝油です
 各一粒に、二千單位のビタミンAと五百單位のD(即ち肝油一盃分の力價)を均等に含有し、幼兒一日一粒、小兒二粒、大人三―四粒の少量服用で十分です。しかも糖衣を施してナマ臭味を封鎖してありますから、誰でも樂々と笑顔で服めます。

百粒(小兒三ヶ月大人一ヶ月分)

……二円五十錢
 藥店にあり



一粒肝油ハリバ